
アーマード・コア4 × インフィニットストラトス〔誰が為に鴉は鳴く〕

ドイツの銀狼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アーマード・コア4×インフィニティストラトス（誰が為に鴉は鳴く）

【Nコード】

N3740T

【作者名】

ドイツの銀狼

【あらすじ】

大切な“何か”を忘れた1羽の鴉のモノガタリ…

素人が書いた自己満足の駄文以下の以下な作品ですが、良かったら読んで感想下さい。

（更新不定期）

マブラヴオルタネイティブにも絡みます

モノローグ（前書き）

どうも、駄文ですがまあ、生暖かい目で見てください。

m ((m

モノローグ

人間は、争っている状態こそが正常なのであり、世界から争いが無くなる事は無い。

故に平和は幻想と妄想の産物でしかなく、世界は常に危うい均衡を保っているに過ぎない。

昔ある奴がそう言っていた。

言葉の通りだ。

人の歴史を振り返って見て欲しい。

世界が平和な時など有っただろうか？

答えはNOだ。

人は常に争い、他者を貶める事を考える。

俺の生きるこの世界などがいい例だ。

熟れて腐りきった果実の様な国家。

パックスエコノミカ（経済による統治）を掲げ、国家に反旗を翻した企業群。

その体制を良しとしない、マブリク解放戦線を始めとする反体制勢力。

混乱の情勢の中に放り出された民間人居住区（コロニー）。

全ての発端である国家解体戦争によって数を減らし、戦場での地位を奪われたAC（アーマードコア）と搭乗者（レイヴン）。

同じく国家解体戦争に置いて30機にも満たない数で何千ものACと国家軍を圧倒した次世代型AC（ネクスト）と搭乗者（リンクス）。

様々な組織、人物が生き残りを賭けて争うこの世界には、もう平和など記録の中の存在であり、二度と拝むことも出来ない物だ。

まあ、俺にとっては拝む気も更々無い。

俺にとって戦場は仕事場であり、最高の空間だからだ。

俺はレイヴンとして戦場に入り、数々の無理難題な依頼を遂行し、伝説とまで呼ばれた。

俺はその呼び名に誇りを持っていた。

しかし、国家解体戦争で俺は撃破された。

圧倒的な制圧能力、常識の域を通り越したハイレベルな三次元空間機動、コジマ技術を応用した最新鋭装備…。

俺は為す術もなく撃墜され、アナトリアコロニーに保護された後、とある男にこう誘われた。

『リンクスとして、もう一度戦場に立たないか？』

俺は即答した。

願ってもない事だった。

だが俺はこの時、選択を誤ったのだとは、まだ気付いていなかった。

モノローグ（後書き）

長ったらしくてすみません。
次から本題に入っていきます
でわDEWA（。・；ノ）ノ

アーマードコア×インフィニットストラトス「誰が為に鴉は鳴く」 プロローグ

いよいよ本題です。

まだISは出て来ません。期待はしないでね（汗）

m ((m

アーマードコア×インフィニットストラトス（誰が為に鴉は鳴く）

プロローグ

side：レイヴン

人は恐怖と餓えには耐えられない。

正にその通りだ。

人が人であるかぎり、この理^{ことわり}は曲げられない。
故に俺は恐怖した。

目の前のモノに…。

廃墟の中に立つ、恐怖と破壊を具現化した異形の機体に。

『…遅かったな』

-プロトタイプネクスト

その名が指す通り、国家解体戦争において企業が開発した切り札であるネクスト…

そのネクストのプロトタイプに当たる。

パイロットへの影響や、EN消費の節約の為に設けられたリミッターは無く、通常のネクストと比較しても、異常とも言える性能を持つ。

正に“白き閃光”…

「何故だ…何故アナトリアを襲った…！」

『今更許しは乞わん…』

「何故なんだ、ジョシユア…！！何故こんな…」

『もはや言葉は不要、語ることとは何もない…！！…！！』

対峙する2機…

相対する白き悪魔と黒き堕天使。
大地に墮とされしは鴉と山猫。

同時にブースターを噴かせて距離を詰める。
残ったライフル弾を撃ち込む。

然しPAに弾き飛ばされ、廃墟のビルに弾痕を残しただけだった。
全ての弾薬を使い切り、葉莢が排出され尽くしたライフルを廃棄してブレードを展開した。
相手もブレードを展開して速度を上げる。

「答えるジョシユアああ！！！！！」

相手のブレードが右腕を切り裂き、そのまま光の刃はコアにまで到達した。

「貰ったぞ！！！」

俺は一瞬の隙を見逃さず、相手の両足を溶断した。
そのまま倒れ込んだ相手を上から押さえつける。

「オーギル！！PA展開と同時に、コジマ粒子出力リミッター解除！！フルパワーだ！！！！！」

「それではPAを維持できません」
「構わん、やれ！！！！！！！」

徐々に機体が白い光に包まれ、2機を覆った。

『こっ…これは…！？』

「…終わり…だ…」

『私も、此処までか…』

光は膨張し――

全てを噴き飛ばした。

『そのちから...でおまえは...』

折れるなよ...レイヴン.....

アーマードコア×インフィニットストラトス「誰が為に鴉は鳴く」 プロローグ

とりあえず一息つきたいと...

（>Σ<）

ブログその2（前書き）

ブログその2ですね。

毎度ながら宜しく願います。

（ 〃 〃 〃 ） （ 〃 〃 〃 ）

プロローグその2

side:???

「首尾はどうだ？」

「順調…とは言い難いですね。」

とある地下施設…

電波もなにも届かない場所にある、暗いオフィス。

そこはさながら、社長室と言った感じだ。

「逐次更新されたデータはフィードバックしていますが、まだ人間に操れる速度ではありませんし、人体重力過重も規定値をクリア出来ていません。」

「それならば心配は要らん…適任が居るからな」

「彼…ですか……」

その部屋に居るのは年期の入った男に、20代後半の女だけだ。

「…そうだよ主任…」 “I.N.” の基礎構築生体ユニットであり、強化人間でもある“奴”ならば、必ずな…」

「然し、上手く召還出来たとしても…賛同するでしょうか」

男は背を預けていた椅子から立ち上がると、背後に広がる巨大な窓から、眼下に広がる施設を見下ろす。

「そんな事は問題ではない……奴が居ること…その事実が必要なのだ」

「“幕引き”…ですか…」

「全ては計画通り…残るは憎まれ役の幕引きだ……早急に準備に掛かれ」

暗い施設の中、規則正しく鳴る機械音だけがオフィス内に響いていた。

まるで…鎮魂歌の如く…

ブローグその2（後書き）

さあ、次回からあのドイツ娘が登場？するかも…

第1話 クラスメートは全員女 + α (修正済) (前書き)

修正しました。

大変申し訳ありませんでした。

第1話 クラスメイトは全員女 + α (修正済)

side: 一夏

「それじゃあ、ショートホームルームを始めますよ」

自己紹介を終えた副担任こと山田真耶先生はにっこりと微笑んだ。
全体的に『子供が無理して大人の服を着た』的な場違い度MAXな
服装で挨拶を終えた。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「……………(。Д。;)……………」

然し、妙な緊張感に包まれた教室内で反応する生徒は居なかった。
何故か？

答えは簡単だ。

それは俺の隣に座っている生徒のせいだ。

その生徒が何をしたって？

それは“格好”を見れば分かる。

(男……………だよな…?)

ここIS学園はその名の通り、ISの使用や扱い方、技術促進を目的とした学園だ。

そしてISは女にしか反応しない。

つまり、IS学園は女子生徒しかいない筈なのである。

まあ、例外が2人ここにいますが…俺の事はテレビでやってたから知っている人は知っているだろう。

だが…

（俺以外にも居たんだ……）

灰色の長い髪を襟首の部分で縛り、瞳は鮮やかな蒼色。
教室内で一番浮いている。

（男一人はつらいからなあ…とりあえず仲良くしておこう）

「では次…柄沢君、柄沢秋仁君!!」

side:レイヴン

傭兵として、頼まれた依頼は完遂する。

それが俺の信条だ。

こればかりは何があるうと絶対に曲げない…筈だったんだが…

「それじゃあ、ショートホームルームを始めますよ」

「……………」

早くも心が折れそうだ…ジョシユアよ。

俺はただ、右も左もわからない場所で助けられた恩返しに何かしたいと命の恩人に提案しただけなのに…

『なら、私の弟と同じ学校へいつてもらう』

…何故こうなった。

俺は話を続ける教師やクラスメートに悟られぬように表情を隠して

いたが、心の中は崩落した橋の真ん中でオーバーヒートして落下するような絶望感に染まっていた。

（なんとかこの状況を打開しなくては…）

「では次、柄沢君、柄沢秋仁君！！」
からさわ・あきひと

遂に呼ばれてしまった…

どうすればいいんだ、教えてくれフィオナ！！

「あ、あの…秋仁君？」

カッ！！

と、瞑っていた目を見開いた。

「ひゃう！！…あ、あの、お、大声出してごめんなさい。お、怒ってる？怒ってるかな？ゴメンね、ゴメンね！！でもね、今自己紹介名前の「あ」から始まって今丁度、秋仁君なんだよね。だから自己紹介してくれるかな…だ、駄目かな？」

本当に教師かこの人。

「いや、怒ってはいない。だからそういう風に謝られても困るんだが…」

「ほ、本当？本当ですか？本当ですね？約束ですよ。約束ですからね！」

ブンブンッ！！

と腕を取って握手された。

…疲れる。

「はあ（溜め息）……まあ、手短にしますか」

席から立ち上がり…

「柄沢秋仁だ。自分の事云々は控えさせて貰うが、一年間よろしく頼む」

高らかに宣言したが、

「……………（もつと色々教えてよ的な空気）……

……………」

（…気まずい…非常に気まずい）

「…以上だ」

俺は早々に話を切り上げ、席に着いた。
本当に勘弁してくれ…ジョシユア。

「じゃ、じゃあ次、織斑一夏君」

問題はこいつだ。

こつちの世界じゃあ女しか使えないISを、唯一使える男らしいが…

「えっと…お、織斑一夏です。よろしく願いします」

簡素だ。

俺に劣らず簡素だ。

「…以上です!!」

ガタッ!!

ほれみる、男2人がこんなだから女子がずっとこけたじゃないか。
…って俺もか。

ゴスン、スパァン!!

直後俺と織斑の頭に 出席簿が直撃した。

せめて織斑と同じように平面で叩いてくれよ。
…なんで俺だけ角なんだ…クライアントよ…

「いてて…って、千冬ねえ!!」

スパカァン!!

嗚呼、痛そうな…

「学校では織斑先生だ…それと、貴様は貴様で挨拶もろくに出来ないのか？」

「「い、いや、千冬ねえ（クライアント）、俺は…」」

スパァンスパァン!!

「織斑先生だ」

「「はい、織斑先生…（。。。）」」

嗚呼、ひそひそ声が聞こえるぞ女子生徒諸君…

然し、まさかクライアントが織斑の姉だったとはな…
まあ薄々感じてはいたが…

「さて、朝のホームルームは終わりだ。諸君らには半月で基礎知識を身につけてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませる。いいな、いいなら返事をしろ、良くなくても返事をしろ！」

「「「はい！！」「」」

霞…お前以上の鬼がここにいるぞ…

こうして第一関門、朝のホームルームは終わった。

早速始まった学校生活の、記念すべき1時間目はIS基礎理論授業で終わった。

隣の織斑が頭上に？を浮かべていたが…

まあ、話しかけられている訳でもないので軽くスルー。

そして1時間目の休み時間。

「な、なあ…ちょっといいか？」

隣の織斑が話しかけてきた。

「ん？何か用か」

「実はさっきの授業内容が解らなくて…出来れば教えてくれると有り難いんだけど…」

………？

「お前…入学前の参考書読んだか？」

「えっ…と、あの分厚い奴か？」

「それ以外無いだろ」

「はは…古い電話帳と間違えて捨てちまった」

それを聞いた瞬間、俺は噴いた。
こいつ…最高だ。

「ぷっ…くく…捨てたって…」

「そんなに笑うなよ…えっと…」

「ふう…柄沢秋仁だ。よろしくな」

そう言って手を差し出す。

「あ、ああ、織斑一夏だ。よろしく」

互いに握手を交わして、俺は参考書を一夏に手渡した。

「やるよ。俺はもう覚えたからな、もう要らん」

「そうなのか…ありがとう。じゃあ早速…」

「一夏、少しいいか」

織斑が参考書を開いて直ぐに、女子に呼ばれた。
確か名前は篠ノ之…

「筈…」

なるほど、知り合いか。

「俺に構わず行ってこい。女を待たすと、愛想尽かされるぞ？」

「？…あ、ああ」

「な…は、早く来い！！」

そのままズルズルと一夏は篠ノ之に引きずられていった。

あいつも苦勞するな…絶対…

2時間目はISに関係する法律や刑法についての講義を受けた。
然し講義の内容が全くわからない一夏は頭から湯気が出そうな勢いだ。

「な、なあ…（ひそひそ）」

「どうした、なにが分からないのか？（ひそひそ）」

「この広域なんたらとかアクティブなんちゃらとかってどういう意味なんだ…全くわからずでは次、織斑君！」…なっ！」
急に呼ばれた為、一夏の声が裏返った。

「世界初の小型汎用重機から発展し、ISの礎にもなった軍用兵器は何でしょうか？」

「えっと…ACですか？」

「はい、正解です！…では、そのACの説明を…柄沢君！！」

説明に困るな…

俺の世界のACの説明でいいのか？

「…基本シャーシとなるコアと、外部フレーム、内装パーツによって構成される、最低限の負担であらゆる形状のマシンを構築できるよう対応を図る「コア思想」を元に開発された汎用戦闘機械です。IS登場以前までは戦場の主役として席卷していました」

「はい、そのとおりです！流石ですね」

周囲から「おー」と声が挙がる。

「こっちじゃ常識じゃないみたいだな。
…ん？」

「…！」

金髪の女子生徒と目があつた。

然し、相手は不機嫌そうに鼻を鳴らして視線を逸らした。

…なんなんだ？

「では、次の123ページを…」

「ちよつとよろしくて？」

2時間目の休み時間。

一夏の勉強を手伝っているとさつき目があつた女子が、腰に手を当て、透き通つたブルーの瞳をややつり上がった状態で、見下していた。

「へ？」

「なんだ」

「まあ！なんですよ、そのお返事。私に話しかけられるだけでも光荣なんですから、それ相応の態度と言うものがあるんじゃないかしら？」

……………（□）……………

「なあなあ、秋仁。お前の知り合い？」

「わたくしを知らない？このセシ…」

「イギリス代表候補生、セシリア・オルコット。IS適性はA+…

搭乗ISは「ブルー・ティアーズ」。長距離射撃戦対応型武装を多数搭載する、高機動射撃戦仕様か」

一夏の頭の上に、また？が浮かんでるが、とりあえずまたスルー。

「あら、よく知っていますわね」

「…代表候補生の実力が気になったんでな…調べてみただけさ」

こうでも言っておかないとこういう人種は面倒くさいからな。

「そう、エリートなのですわ！！あなた達のような下々とは格が違いますの。…時にあなた、ACに詳しいようですけど…」

「ああ、実際に搭乗して戦闘に参加したこともある」

前の世界の事は他言無用とクライアントに言われていたが、まあ、少しくらいなら大丈夫だろう。

「そんなあなたが何故ここにいるのかしら？」

「知らん。E-程度の適性があつたからだろ」

「あらあら、その程度の適性でよくISが動かせますわね？…あなた、AC（鉄屑）の方がお似合いでしてよ」

「ふ、実戦も知らん小娘に言われたくはない…貴様程度の相手なんぞ、戦場なら8分持てばいい方だな」

「なんですって！？模擬戦で教官を倒した、この入試主席のわたくしを馬鹿に…」

「あれ？俺も倒したぞ」

「さらっとすごい事実を突きつけてきたな、一夏」

「な、なな…」

セシリアは憤って何か言おうとしたが、その前に授業開始のチャイムが鳴り、

「また後で来ますわ！逃げないことね！よくって！？」

そう言って自分の席へ去っていった。

「この時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する…ああ、その前に再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないとな」

ふと思い出したように、クライア…織斑先生は唐突にそう口にした。

「なあなあ、クラス対抗戦ってなんだ」

「入学時点での各クラスの実力推移を測るための模擬戦だ。代表者は学級委員長的な事をやらされた挙げ句、そのクラス対抗戦に出場せにゃならん。ちなみに一度決まると一年間の変更できない…あしからず」

ざわざわと教室が色めき立つ。

一夏は一夏で事前知識皆無な為、全く意味がわからないらしい。

「はいっ、織斑君を推薦します！」

「私は柄沢君を推薦します！」

「他に候補はいるか？いないならこの二人から……」

「……って、俺！？」

あ、やりやがった

スパアン！！

「織斑、目の前に立つな。邪魔だ。……ではこの二人から……」

「待って下さい！納得いきませんわ！」

パンツと机を叩いて立ち上がったセシリアは、怒涛の剣幕で言葉を荒らげた。

「物珍しいからと言って、あのような何の知識もない極東の猿やら生き恥曝しの鉄屑をクラス代表者にされては困ります……！」

ピクッ……

「それにわたくしの方が実力的にクラス代表者になるのは必然。わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来て猿や戦場から逃げ帰ってきた恥曝しの鉄屑と同レベルと言っただけでも我慢なら……」

パギャンツ！！

気付くと俺は握り拳を自分の机の真ん中に叩きつけていた。

その衝撃で机に埋め込まれていたディスプレイが割れ、尖った破片が手に突き刺さって血を流していた。

周りの女子から小さい悲鳴が上がったが、そんな事よりもセシリアの言葉が頭の中でグルグルと回っていた。

「生き恥曝し…だと…？」

セシリアは俺の人生を、俺に命を預けた者たち、互いに雌雄を決した者たち、全てのリンクスやレイヴンを侮辱した。それが我慢ならなかった。

「貴様に戦場のなにがわかる」

「…秋仁？」

止めるな一夏。

「…苦しくとも、辛くとも、ただひたすら己の信じた答えの為に戦った者達を…生き恥曝しだと？」

「え、ええ！その通りですわ！あなた達AC乗りなんて、ただの時代遅れの生き恥曝しでしかありません！……こうなったら決闘で白黒つけましょうか、粗製ACパイロットさん？」

「いいだろう、そっちの方が早いからな」

ここまで言われたら、今まで倒してきたリンクス達や、国家解体戦争で死んでいったレイヴン達に申し訳が立たない！！

「ハンデはどうする？」

「あら、早速お願いかしら？」

「何を勘違いしているんだ？俺のに決まっているだろ」

周囲から溜め息が漏れた。

「か…柄沢君、男が強かったのって昔の話だよ？」

「確かにESを使えるかもしれないけど…代表候補生にE・はちよつと…」

「何を言っているんだ？…簡単に倒してしまったらつまらないだろ」

そう、簡単にはやらせない。

「…やるぞ一夏」

「ああ、あそこまで言われたら黙ってなんていられるかよ」

「決まりだな」

織斑先生の言葉で周囲は我に戻ったように、ガタガタと姿勢を正した。

「それでは一週間後の月曜日、放課後の第三アリーナで行う。柄沢、オルコット、織斑はそれぞれ準備しておけ。」

こうして、波乱に満ちた学園生活は幕を開けた。

だが俺は気がつかなかった。

知らず知らずの内に…

運命の齒車も、音を刻んでいる事に…

確実に…一つ一つ…

終焉に向けて…

第1話 クラスメイトは全員女 + α (修正済) (後書き)

会社の弁当が不味くて泣きそうだ…

クラス代表決定戦!!…と愉快なレイヴン&リンクス達の襲来? 前編(前書き

随分遅くなりましたが、あしからず…

(> Σ <)

クラス代表決定戦！…と愉快的レイヴン＆リンクス達の襲来？ 前編

side:レイヴン

試合を宣言してから5時間後…

「やっと…終わっ…た…」

一夏が机に突っ伏して頭から湯気を出している。

えゝ今現在、放課後。

そして夕暮れの教室内。

何をしていたのかと言えば…

「流石に此処まで飲み込みが悪いとは…予想外だったぞ」

「しょうがないだろ…意味不明な単語ばっかで理解できないんだ」

一夏に頼まれて勉強を手伝ってやったら…

「あ、あくていぶ…まに、ぴゅ…れ……………だああ！！日本語書けよ
！！」

一夏、人はその文字を日本語と言っただよ…

俺も“昨日”読めるようになったんだけど。

「織斑くんは柄沢くん、まだ教室に居たんですね。よかったです」

「はい？」

呼ばれて2人して顔を上げると、山田先生とクライ…織斑先生、それと1人男の教諭と思しき人が立っていた。

（?…どこかで見たような…気のせいかな?）

山田先生は山田先生で、なにやら色々書類を手に持っている。

「えつとですね…寮の部屋が決まりました」

そう言つて俺と一夏に鍵と番号の書かれた紙を渡してくる。

「俺、前聞いた話だと一週間位家から登校だつて聞いてたんですけど…」

「織斑ちゃんと柄沢くんの場合、事情が事情なので一時的な処置として部屋割を無理矢理変更したらしいです」

一夏と俺の部屋は別々だった。
そこまで手が回らなかったか。

「わかりました…ところで、その人誰ですか?」

鍵を受け取つた一夏が山田先生と織斑先生の後ろに立つ男に指を指した。

「あ、あの…えつと…一夏くん、この学校の理事長先生ですよ」

「理事長?...男なのにな?」

スパァン!!

「全く、入学式で挨拶していただろ？…すみません理事長」

「構わんよ…男はこれくらい活発でなければな…それと…」

「久しぶりだな、小僧。ベルザ高原以来か」

聞き間違いだろうか。
いや、違う。

“俺はこいつを知っている”

「まさか……………ウー・ター・ロン鳥大老…？」

「あの時は邪魔が入ったが…また殺り合いたいな」

俺は頭を掻いた。

久しぶりに懐かしい奴が現れたから少し混乱してるらしい。

「ああ、まさかとは思うが…他にも？」

「ああ、他にもいる」

数分後、理事長室へ移った俺達は異様な空気に包まれていた。何故なら……

「やはり君も来ていたか……この気配、久しいな」

「ジャック、ドウシタ。ナゼ、ワラッテル…？」

「鳥大老、後で玉露を煎れるんだが……」

「すまん、G・ファウスト。芋羊羹をだそう」

「ふ、ふふ、血が…血が騒ぐぞ!!!
血がああああ!!」

[illegible]

「ジャウザー、了解した。後で芋羊羹をお裾分けしよう」

バンツ！！

(ドアを開ける音)

「ジャック、私こそがドミナントであると証明してやる！！」

さあ、チェスで勝負だ！！」

「エヴァンジェ隊長……そろそろ諦めた方が……」

「そうですよ隊長。」

ジャンケンでさえ1回も勝った試しが無いじゃないですか」

「トロット、ゴードン止めるな！！！！私が、私が成すべき事なのだ！！！！！！」

「ふん、五月蠅くて仕方が無いな」

「あら、リムファイヤーさん。紅茶はお気に召さなかったかしら……？」

「プリンシバルか。いや、なかなか気に入った」

「本当ね。後であの人に出して貰っても……「ムーム！！」嗚呼、ガルム！！」

「逢いたかったぞムーム！！」

「嗚呼、愛しのガルム！！」

ひしっ！！

「そおら！！！！こっから先へは行かせないZE！」

「グリーン・ホーン貴様あ！！」

「はっハッHA！！」

ファントムの親父っさんはレースゲーム苦手だもんNA！！」

「それ」

「「…あ」」

「ふ、まんまと騙されてくれたな」

「「ズベン・Ｌ・ゲヌビ！？」」

「罾を設置したのはこの俺さ！
そつとも知らず、おめでたい奴らだ！！」
マ●オカートやつてる

…地獄絵図ならぬ鴉絵図だった。

「お、おい柄沢、誰なんだこの人達」

「……はあ（溜め息）」

「さて、では改めて自己紹介させてもらおう」

ジャックが椅子から立ち上がり、織斑先生、山田先生、一夏に挨拶をした。

「元バーテックスリーダー、そして元レイヴンズアーク主宰を勤めていたジャック・Ｏだ。」

今後は学園の臨時教諭を担当する。
以後宜しく」

「こ、此方こそ…」

一夏は織斑先生に無理矢理押さえつけられ、山田先生と一緒に頭を下げた。

「うむ…次に、私の隣に居るのが同じくバーテックス所属のンジャムジ、G・ファウスト、Ω、理事長の鳥大老だ」

「ンジャムジ、ダ…ヨロシク。
霊媒師ヤッテル…」

「G・ファウストだ。
いい面構えだな、気に入ったぞ坊主」

「Ωだ。
さつきは取り乱して済まなかったな」

黒人と初老のドイツ人とマッドサイエンティストな雰囲気の方が頭を下げる。

「次は私の番だな。
私は国連軍戦術チーム、アライアンスの司令官を勤めていたエヴァンジェだ。

今年から学園の用務員を勤める事となった。
そして私の左側に座っているのが、同部隊所属だった部下のジャウザー、ゴールディ・ゴードン、トロット・S・スパー、プリンシバルだ」

「ジャウザーです。精神科医と学園の保健医をしています。以後宜しくお願いします」

「ゴールド・ゴードンだ。

この学園の食堂を担当している。

…宜しく」

「トロット・S・スパーです。

エヴァンジェ隊長の補佐をしています。宜しくお願いします」

「プリンシバルよ。

ジャウザーさんと一緒に学園の保健医をしています。よろしくね、一夏君」

「…は、はあ」

「続いて窓側に陣取っているのがリムファイヤー、ファントム、グリーン・ホーン、夫婦で孤児院を経営しているケルベロスⅡガラムとムーム、ズベン・L・ゲヌビ…それとここには居ないが後数人いる」

一夏や織斑先生、山田先生も相当困惑している。

助け舟を出すでしょう…

「…俺がAC乗りだって言っただよな、一夏」

「あ、ああ」

「AC乗りは総称して“レイヴン”と呼ばれるんだが…俺を含め、

ここに居る奴ら…全員が“レイヴン”だ。そして…」

「全員俺が殺した奴らだ」

クラス代表決定戦！！…と愉快なレイヴン＆リンクス達の襲来？ 前編（後書き

今回は前編後編に分けます。

アンケートを採ります。

出てきて欲しいリンクスを教えて下さい。

敵キャラとしてか味方キャラとしてか、4か4 a n s w e r かは問いません。

4だと有り難い。

但し有澤の社長さんは出します。

途中経過報告・其の1（前書き）

ノリで書いたけど…駄目だこりゃ
○（、（○

途中経過報告・其の1

カポーン…

「やあ、画面の前で妄想しながらこの報告を読んでいる諸君。有澤重工代表取締役の有澤隆文だ。とある温泉から失礼するぞ」

「同じく元有澤重工所属のオリジナル、ワカだ。気軽に若と呼んでくれたまえ」

「ところで親父殿、何であなたがここにいますか？ゲームでもシュミレーターでしか出て来なかったと言うのに…」

「ふつ、実はな…今朝、蒼龍さんから感想が届いてな。今回は欠番扱いになる筈が、登場決定になることになったのだよ！」

「な、なんと…」

「私達も忘れて貰っては困るな…逝けるな？フラジール」

「若干字が違う気はしますが…はい、欠番扱いの可能性は殆ど有りません」

「私達も登場決定よ！！行くわよユージン、リリウム！！」

「姉さん分かったよ。」

でも無茶して出番台無しにしないでね」

「私も行きますわ！

お姉さま、お兄さま！！」

バシャバシャ！！

「貴様等、温泉で暴れるなあ！！

O G A M Iで吹き飛ばして差し上げようか！？」

「ふ、有澤重工代表取締役か…タンク風情が何を「メルツェ〜〜〜
〜〜〜〜〜ル！！！！！！」…落ち着いて話し合おうか、落ち
着いて…」

「はい、その為のフラジールで…！！？、A M Sから光が「言わせ
んぞ箱風情が！！」

五時間経過…

「あゝ…さて、ようやく静かになったところで…次回はいよいよ我
等がレイヴンのI S初起動とセシリア嬢とのクラス代表決定戦だ」

「うむ、ではまた来週！！」

「ところで息子よ、？はでないか？」

「さあ…私的にはデュアルフェイスがみたいですが…」

「まあ、次回に期待だの」

「あまり期待しない方が得策だと思っんですがね…」

途中経過報告・其の1（後書き）

なんとPV15000越えました。
皆さんアリガトウゴザイマス

第2話クラス代表決定戦！！…と愉快なレイヴン＆リンクスの襲来？ 中編（前

更新遅れて申し訳ない…

第2話クラス代表決定戦！…と愉快なレイヴン＆リンクスの襲来？ 中編

side：レイヴン

「…ふぁ…朝か…」

あれから二日たった。

あの後俺達は数分会話して解散した。

織斑先生達は早々に立ち去ってしまったが、一夏に至ってはなんか顔色が優れなかったから腹でも下したか…しかし…

「ジナイーダ…」

やはりお前も…お前も居るのか？

我が最愛の…好敵手…

side：一夏

朝の6時…外は生憎の雨で、今日は休み。

同室の筈は朝から剣道場で汗を流しているだろう。

事実、さっき叩き起こされて剣道場に拉致されそうになったが、体調が優れなかったから遠慮しておいた。

天井を見上げ、2日前の事を思い出す。

『全員俺が殺した奴らだ』

あの言葉の意味も、それを口にした柄沢の、懐かしむようで哀しいような表情の本当の意味も分からなかった。

「レイヴン…か…」

気になる。

あいつの過去に何があったのか。

あいつの力になりたい。

「と、なれば…早速行動開始だな！」

ベッドから飛び降りて廊下に向かう。

俺の良いところは思ったら即行動に移すことだ。
まあ、自負だが。

「柄沢…、いるか…あれ？」

柄沢の部屋をノックするが、応答がない。
出掛けたかな？

試しにノブを回してみると…

ガチャ

「開いてんじゃないかよ…柄沢…」

ツカツカと中に入るが真っ暗で何も見えない。
電気をつけようとスイッチの灯りを探したが。

「えっ？…うわぁっ!？」

突然後ろから腕を締め上げられ、そのまま壁に叩き付けられた。

「誰だ、何が目的だ」

それは柄沢の声であり、柄沢の声ではなかった。
その声を聴くと寒気や震えが止まらなかった。

「お、俺だよ…柄沢…」

「一夏…?」

ガチャ

「レイヴン、頼まれてた薬と紅茶が…」

「…あ」

沈黙がながれた。

今の体勢は俺が一夏に組み伏せられて…

ま
ず
い

「…ごめんなさいレイヴン…お取り込み中だったみたいね／＼／」

「まっ、まてプリンシバル、誤解だ！！俺はただ侵入者だと思って
だな！！ってか顔赤くするな！！変な妄想を掻き立てるな！！あ、
待て行くな！！おい待てこらあ！！！！俺この後出掛けたから事
態を深刻化させんな！！」

プリンシバル先生はそのまま薬と紅茶を置いてツカツカと歩いてい
ってしまった。

そしてそれを追って走る俺達男子高校生2人…

俺が心配しなくても大丈夫…なのか…？

side：セシリア

小雨模様の空を眺めながらコーヒーを味わう。

此処はショッピングモールの一角にあるオープンテラスのカフェ
@クルーズ」。

その中でも、ショッピングモール内ではなく外に面しているテラス
でキリマンジャロを頂いていた。

「まあ、こういった雰囲気も…悪くは無いですわね」

然し、あの柄沢とか言う男性に…少し言い過ぎたかも知れない。
元々話し掛けたのは…自分で言うのも何なのだが、彼が気になった
からだ。

明らかにもう一人の男や周りの女子とは違うオーラを纏っていた。
そこに惹かれたのかも知れない。

「…考えるだけ無駄ですわね…キリマンジャロをもう一つ下さいな」
「了解した」

紫髪のショートカットに執事服という出で立ちの女性店員にコーヒ
ーを注文する。
そして、手元にあったキリマンジャロを飲み干すのと、店内から発
砲音が響いたのは同時だった。

@クルーズ店内

「へっへっへ、いい稼ぎになりやしたね兄貴!!」

「全くだ、こうも平和ボケしてくれてると、稼ぎやすいつたらねえ
からな…それに俺達にはこいつがあるからな!!」

乾いた破裂音と共に蛍光灯の破片が降り注ぐ。

「きゃあ!!」

「ひい!!?」

「おら黙ってろ!!次騒いたら1人づつ頭吹き飛ばすぞ!!!!」

セシリアはとりあえず傍観を決め込み、相手を観察した。

（ショットガンが1人、サブマシンガンが1人にハンドガンが1人
…十秒持てばいい方ですわね）

セシリアは席から立ち上がり、犯人達へと近付こうとした。
が…

「ほう、なかなかの年代物だな…イサカM37か」

どうやって近付いたのか…つい先日喧嘩したばかりの柄沢が犯人達
の後ろに立っていた。

side:レイヴン

一夏やクラスメートの女子に教えてもらった旨いコーヒーや紅茶が
飲める店…@クルーズだったか？

昼間から変な噂をプリンシバルが流しそうになったのを阻止する為
に走り回って早7時間…

今日こそはゆつくり休もう。
そう思ってたんだが…

「何故こうなった…」

@クルーズを見つけ、店内に入った瞬間強盗登場！！

ふざけんなゴルア！！

まあそんなこんなで約5分後には警察がライオットシールドを装備して店を包囲し、犯人達とにらめっこをしていた今日この頃。

（つまんないな…なんかないかなあ…って！）

犯人の持つショットガンに目が止まる。

なかなかの年代物だ。

「なかなかの年代物だな…イサカM37か」

「……なっ！！！」

犯人達＋セシリア&店内の従業員と客がポカンと口をあけた。

「油断しすぎ」

先ずショットガンを持った犯人の顎に下からアッパーを喰らわせる。

「ばぎょ！！？」

犯人の身体が真上に2mほど浮かぶ。

脳髄へ直にダメージを与え、一撃で武装解除。

「次!!」

手近な机の上にあった鉄製のトレイをサブマシンガンを持った犯人の顔に、ブーメランを投げる要領でめり込ませる。

「によば!!?」

此方は鼻に直撃し、ゴキッ…と何かが折れる音がした、が…毎度の事ながらスルー。

「さてと、最後は…」

ハンドガンを持った犯人は誰かに銃を向けて拘束していた。あれで人質のつもり…

「…セシリア嬢?」

「…ご機嫌よう」

犯人に捕まっていたのは、意外にもセシリアだった。代表候補生は一通りの戦闘訓練は受けている筈なんだが…いや、ここは…

「う、ううごくな!こいつがどうなっても…」

「…セシリア、パス」

「へ?」

セシリアが犯人の腕を掴み、

「私に指図しないでくださる！」

一本背負いの要領で俺に向かって投げつける。

「夜空の星になれやゴルア！！」

鉄製の椅子を持ち上げ、飛んできた犯人をフルスイングで殴り飛ばし、店外の警察の目の前に着弾させた。

「まあ、これで一件落着と」

「無茶なさいますわね」

あの後、俺達は警察の事情聴取の為に警察署にやってきていた。

「いや、セシリアなら遣ってくれると信じてたさ」

「なっ、何を／＼」

「さて、お見えになったな…」

待合室の扉が開き、警察の制服に帽子という出で立ちの金髪のフランクが入ってきた。

「諸君等か、事件を解決させたのは」

そこまではいい…

なんでフランス人がここにいるとか、どっかで見たことある奴だとか…

「レオハルト…」

「やはり貴様が、レイヴン」

ガチャ

「レイヴン、生きているか…まあ、あの程度で遅れを取っていたら傭兵の名が泣くがな」

「アマジীগー!!?」

「レイヴン、迎えに来たぞ」

「さらつと出て来て周りに馴染むなベルリオーズ!!」

ほれみる、隣のセシリアが目を丸くして固まってるじゃないか!!

「ってか、何でお前等が居るんだよ!!レオハルトはまでも…アマジীগにベルリオーズ!お前等俺が撃墜した筈だろ!!」

「知らん…お前に墜とされた後、気付いたらこの世界に居たんだからな。それと…」

「ほ、他にも居るとか言うなよ…?」

「いや、今現在は我々だけだ」

ホッ…

俺は胸をなで下ろした。

これ以上増えたらどうなるか分かったもんじゃない。

「我々はこれからIS学園に勤務する事になったので…近々挨拶はしようと思っていたが、手間が省けたな」

……………は？

「という訳だ。貴様と馴れ合うのは些か納得行かないが、“大天使”のよしみだ、よろしく頼むぞレイヴン」

「前々から貴様とは決着をつけたかった。楽しみにしてしているぞ」

俺は溜め息混じりにうなだれた。

嗚呼、平穏な学園生活が…

一週間もせずに崩れ去る音しかなかった。

第2話クラス代表決定戦！！…と愉快なレイヴン＆リンクスの襲来？ 中編（後

次回やつとセシリア戦です。

社長が乱入するかも…？（物語に）

クラス代表決定戦!!…と愉快なレイヴン&リンクスの襲来? 後編(前書き)

長かった…

クラス代表決定戦！…と愉快的レイヴン＆リンクスの襲来？ 後編

IS学園 第3アリーナ

第1ピット

side:レイヴン

「はてさて、どう行くな」

今日はセシリアとのクラス代表決定戦だ。

あれだけ大口を叩いたのだから、手は抜かない。

「…にしても、柄沢のISまだこないのか？
もうすぐ始まるぞ」

「最悪、リヴァイヴで出るさ…そう言う一夏も油断するなよ？
お前の『白式』はゴリゴリの近接格闘戦仕様だ。
セシリアの『ブルー・ティアーズ』とは相性が悪過ぎる」

そう、一夏のIS…『白式』は、武装が近接ブレード一本のみという超が付くほどのゴリゴリ近接格闘戦仕様だ。

こういった機体で射撃機に挑む際は、僚機の援護射撃で敵の意識をそらせ、その隙に攻撃する…といったヒット&アウェイ戦法がセオリーだ。

「どのタイプのISかによるが、俺が援護射撃でセシリアの気を逸らす。」

その隙にお前は一気に加速して確実に一撃を入れる…これで行くぞ」

「それしかないか…」

「もつと気合いを入れろ一夏!!」

篠ノ之が一夏に激を飛ばす。

今までの5日間、俺達は放課後に剣道場で剣道の稽古をつけていた。専用機を持っておらず、尚且つ学園の練習機『打鉄』も予約が入っていた為、少しでも鍛錬のしようがある近接格闘に重点を置いたわけだ。

「…剣道の稽古しといて良かったろ？一夏」

「ああ、助かったよ箒」

「べ、別に大した事では……ない／＼」

『柄沢君！柄沢くん、柄沢くん!!』

2階の管制室から声が響く。

この声は山田先生か。

「届きましたよ！柄沢君の専用機が!!」

ガコンツ…

灰色。

そう、無骨な灰色。

そして所々にあしらわれた赤いカラーが目を引く…

『これが柄沢君の専用機…』

俺のかつての愛機…

『ワンオフIS、カスケード・レンジです』

side:???

アリーナ観客席の最上階、一番眺めの良いVIP席に座る、灰色のスーツの男と黒いスーツを着崩した男の2人…

その2人は、さながら新しい“製品”の試験を心待ちにする開発者のようにそわそわしていた。

因みに、決してトイレに行きたいわけではない…あしからず。

「…然し、よく来てくれた。会社の方も忙しいだろうに」

「構わんさ、これしか能がないからな。…それもこれも、“奴”を葬り去るためだ」

灰色のスーツの男は、そう言つと隣の男からアリーナへ降り立った柄沢へと視線を下げた。

「…やはり気が退けるか…？」

「奴を此処まで追い込んだのは私達だからな…流石に、そう簡単に

割り切れるモノでもない」

黒いスーツの男はゆっくりソファに腰掛け、足を組んだ。

「あまり、背負い込むなよ……ジャック・O……」

「それはお互い様だ、有澤隆文」

side:レイヴン

『あら、逃げずにきましたのね』

前方約60m -

地上から約30m -

『当たり前だろ』

「……」

敵主兵装着弾予測時間0.4秒

敵機検索完了 -

ブルー・ティアーズです。

敵は高威力の長射程ENライフルを装備。

距離を離すと危険です。

高機動の中距離戦闘スタイルと予測されます。

『最後のチャンスをおげますわ』

『チャンスって？』

『私があなた達に対して一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を全校生徒に晒したくなければ、今謝ると…』

「下らん」

武装選択 -

W B 1 1 M - H Y D R A

敵ロックオン

『なっ…！？』

『柄沢！？』

発射

瞬時に武装を選択し、発射。
ここまでにかかった時間、1秒。

『くっ…』

ブルー・ティアーズが左に平行にスライドし、ミサイルをスター・ライトmk?で迎撃。

爆風で視界を奪う。

武装選択 -

YWH16HR-PYTHON

右手に持ったENレールガンをセシリアに向けて撃つ。
然しバリアーに掠っただけで直撃はしなかった。

『随分…デタラメな出力ですわね』

セシリアが苦虫を噛み潰したような顔をする。

「出鼻は挫いた。攻めるぞ一夏」

『あ、ああ!!』

「27分…俺と闘ってここまで持ったのはお前が始めてだ」

『お褒めに預かり光栄ですわ…』

あれから27分、俺と一夏はセシリアに対して当初の予定通りヒット&アウェイを繰り返してセシリアのシールドエネルギーを削り取っていた。

然し一夏も、セシリアのライフルの相当数を喰らっているので油断は出来ない。

『そろそろ、閉幕と参りましょう!!』

セシリアがビット兵器・ブルー・ティアーズを展開、俺と一夏に向けて放ってきた。

『この時を待つてたぜ! 2機は任せろ、柄沢!!』

「一夏、油断するな…よつと!!」

瞬時にレーザーブレードを展開してビットを一閃、真つ二つにする。

『そ、そんな…!?!』

「つたく、アクアビットとキサラギが喜びそうな装備だな!!…それにお前さんの攻撃パターンは総て把握させてもらった! お前は俺達の反応速度が遅い所を必ず狙ってくる!!」

『然も、お前はその装備に毎回命令を送らないと動かない上に、使っている最中は他の行動が出来ない!! 制御に集中してるからだ! 違うか!!』

セシリアの表情が驚愕に歪む。

ISの全方位視界接続は“完璧”だ。

そして“完璧”であるからこそ油断と隙が出来る。

『もらったあ!!』

一夏がイグニッション・ブーストで一気にセシリアとの距離を詰めた。

『かかりましたわね!』

途端にセシリアのスカートアーマーの一部が反転して砲門が現れた。

(あの口径…高誘導式弾道型ミサイル!…)

「一夏!下がれ!」

俺はOBを展開して一夏の前に躍り出た。

『なっ…!?!』

爆発。

一発は身を呈して受け止めたが、もう一発は一夏の腹部に直撃。

俺達は爆風に包まれた。

「一夏っ…!?!」

篤がたまらず声を上げた。

先生達も真剣な眼差しで画面目を見上げていた。

「全く、ヒヤヒヤさせおつてからに、小僧共め。…しかし、いい弟を持ったな織斑先生」

「お褒めに預かり光栄です、理事長」

この二人を除いて。

side：一夏

ゆっくり目を開ける。

最初に飛び込んだのは、一次移行 ファーストシフト の文字と、目の前で傷だらけになった柄沢だった。

「柄沢！！」

『……………』

いくら呼び掛けても応えない。
よく見ると、装甲と装甲の間から血が流れている。
が、何か様子がおかしかった。

「柄沢…？」

さっきまでと雰囲気が違う。
そう、例えるなら…

殺気の塊。

『基礎生体ユニットのダメージが…90%を越えました』

『エネルギー供給率…低下』

『危険度レベル - Bと判定』

『最終安全プログラム - 解除』

『インターネサイン - 再起動』

『■■■■■■■■■■!!!!!!』

「やっと目覚めましたか」

「ふん、そうでなくては…ローゼンタールの2大天使の名が泣く」

「あらあら、凄いことになってるわね」

VIPルームに続々と、レイヴンとリンクスが集まってくる。
皆、一様にアリーナ中央で機械的な叫び声を上げる柄沢へと視線を向けている。

「…さあ、諸君」

ジャックはソファから立ち上がり、高らかに宣言した。

「総ては此処から始まるに過ぎん…そう、これは始まりでしかない。
我々は新たな時代を担い、“奴ら”からこの世界を解き放つのだ」

そう、総ては始まり…

終わりへと続く…始まり

クラス代表決定戦！…と愉快なレイヴン＆リンクスの襲来？ 後編（後書き）

今回は設定をかきます

さて、ここでアンケートを取ります。

主人公達はこの後、とある組織を結成しますが、その組織の名前を募集します。

あと、今後の展開で何か要望があればお知らせください。
宜しく御願い致します。

第3話 ようこそビッグボックスへ 前編（前書き）

デュアルフェイス「短いな」

ステインガー「仕方ないだろう、俺は面倒が嫌いなんだ」

メアリー・シェリー「言い訳になってないわよ野良犬」

第3話 ようこそビッグボックスへ 前編

side:レイヴン

意識が覚醒する。

体全体が重く、関節がギシギシ言っている。
目を開けると、自分の部屋ではなく…

「保健…室…？」

「気が付きましたか？レイヴン」

学園の保健室で寝た記憶は無いんだが…。
そういえば。

「ジャウザー、試合はどうなった」

「…インターネサインへ一次移行し、相手を追い込んだまではよかったのですがね。エネルギー切れで外壁に突っ込んで意識不明、一夏君もあと一撃だったんですが…あなたと同じくシールドエネルギーが切れて試合終了、セシリア嬢の勝利です」

負けたのか…

やっぱり腕が落ちてるな。

掛布をどかし、立ち上がる。

「おっと…あれくらいでガタが来るとは…」

「まだ休んだ方がいいんじゃないんですか？それにもう少ししたらお客さんが来ますし…」

「客？俺にか？」

「まあ、会ってみれば分かるはずだと言っていました…」

？…何なんだ。

「もう少し歩けるか？」

「ああ、問題ない」

その後、織斑先生に連れられてIS学園の地下にある、とある施設に案内された。

「しかし、ジャウザーもクライアントも回りくどい…客とか言うてたが…」

「会えば分かる…と言っていたが？」

「エドガー・アラン・ポー著書の『メルツェルの将棋指し』を持った三十路のおっさんにいちいち叫ぶ日系人、Thinkerを口ずさんでる中年男に色白な二十代と、よくわからん毒舌家だったか？…まあ大体想像は付くが……帰っていいかな！？」

クルッ、ダッ!!

(反転してダッシュ)

「許さん」

ガシッ

(襟首捕まえられた)

「IS学園地下のビッグボックスへようこそ!! 歓迎しよう! 盛大にな!!」

「チーズフォンデュの準備出来たぜ!! メルツェ~~~~~
~~~~~ル!!!!!!」

「オールドキング! 気をつけろ!! 蚊が居るぞ!!」

「所詮は害虫駆除だ。刺激的にいこうぜ」

「どうやって刺激的に殺虫剤を撒くのよ」

「何だ、いたのかジュリアス。まあ、空気で構わんな」

「「.....はぁ(千冬&柄沢)」」

まあ、薄々気付いてたよ…でもさ…問題はそこじゃなくて…

「学園の地下に何造ってんだよ！！お前等はサンダー・ードかってんだ！！馬鹿バカヴァカ！！！！！！」

「仕方なかるう、テルミドールの指示だ」

「はあ！？おい、テルミ人形！！どういうこつた！！」

「まあ待て、理由はメンバーが集まってからだ」

「……………メンバー？」

1時間後…

「良く集まってくれたな。それじゃ、始めようか？」

小さな会議室に、メンバーと呼ばれた者達が集まっていた。

「ジャックにエヴァンジェ、レオハルト…ベルリオーズまで…」

「黙っていて悪かったな…テルミドールの指示だったのな」

「まあ、その話は後にして…始めてくれ、テルミドール」

レオハルトに案内され、俺が皆の座る円卓に着くと中央に立体の画像が幾つか映し出された。

「まず始めにレイヴン、君に協力してもらいたい事がある」

数枚の画像の中から、何やら塔か何かのような画像が映し出される。

「其れがこれ……」

「“管理者”の破壊だ」

### 第3話 ようこそビッグボックスへ 前編（後書き）

えゝ設定なんです、不評&矛盾大多数だったので消去しました。

筆が進まないorz

なお感想等は何時でもつけつけています。

（→はうp主の主食です。）

「こんな機体でねゝのかYo」

や、

「こんなレイヴンとかリンクスでねゝのかYo」

など、常時受け付けていますので、よろしく願います。

因みに極力反映させますので、あしからず

第3話 ようこそビッグボックスへ 後編（前書き）

短い…

筆が進まない…

### 第3話 ようこそビッグボックスへ 後編

「…以上が概要だ。理解して貰えたかな？」

「つまり、旧世代の遺物である管理者の試験稼働機が何故か稼働していて、人類抹殺を企てている…それを阻止するために管理者の本体がある、中国の新疆ウイグル自治区カシュガルの地下施設を攻略すると同時に、無人兵器群を破壊する…と？」

とても信じられない内容ばかりだ。

「そのとおりだ…我々はこの新生クローズプランを下に活動している…是非我々に協力してもらいたい」

「君を騙し、此处まで追い込んだ我々が言うのだ…到底信じ得ないだろうという事は承知している。だが、此处で立たねば世界は滅び、人類と言う種は滅亡する…私とてその様な事実を見過ごす程馬鹿ではない…頼む…」

「……………管理者側と此方側の戦力差は？」

俺がそう切り出すと、テルミドールの隣に座っていたメルツェルが中央ディスプレイにORCA旅団の現戦力を映し出した。

「我方の戦力は実働部隊、整備班、非戦闘員を含め5000。内、レイヴン組のノーマルが19機、リンクス組のネクストが10機と…それからAFジェットが5機だ。

…対して、管理者側は無数の特攻兵器群、大多数の無人MTに無人ノーマルと…未確認情報ではあるが、AFランドクラブ改良型も数

機確認された。

恐らく、トールラスで極秘裏に建造されていた物だろうな」

「そのトールラスはいまどうなってる？」

俺は続けて質問する。

「国連と各国によって情報統制されているが…謎の部隊に本部を強襲され、壊滅したそうだ。

各地の企業でも同様の事件が多発しているが、どれもトールラスのよ  
うに本格的ではなかった」

…………。

正直迷っていた。

俺に“そんなこと”をする権利があるのだろうか？

アナトリアさえ護りきれなかった俺に…

「…テルミドール、未確認のレイヴンとリンクスを掻き集めるぞ」

「…！！」

では！」

「俺に誰かを護る資格なんてない…が、あんな思いは二度としたくない。

…必ず勝つぞ、みんな」

「当たり前だ」

「それこそ、ラストレイヴンの名を冠する者の面構えだ」

「成長したドミナントの力…見せてもらっぞ」

俺は皆と共に決意を固めた。

もう過去から逃げない。

見ていてくれ、ジョシユア。

この世界だけは護ってみせる。

今日、この時…

新生ORCA旅団は結成された。

第3話 ようこそビッグボックスへ 後編（後書き）

次回は番外編です

番外編 ビッグボックスラジオ局

オールナイトORCA!! (前書き)

番外編です。

ラジオトークです。

本編には全く関係ない…くはないです。

「ハイハイみなさん！」

「今日も元気に人類の為に頑張ってたかな」

「オールナイトORCA!!の時間だよ」

「司会は勿論この私、IS学園生徒会長兼学園1のアイドル更識楯無と……」

「柄沢秋仁だ、よろしく。」

「……ところで楯無……だったか？」

「俺がメインの司会で構わないんだよな？」

「そのとおり」私はボケ担当だからね」

「じゃあ早速、ゲストの方に登場してもらいましょう！」

「どうぞ」

「私がよもやこのようなラジオに出演する事になろうとはな」

「あれ、テルミドール？」

「さっきメルツエルが「テルミドール……書類のサインから逃げないでくれええ……」って言ってたが……いいのか？」

「テルミドールは雑務の過労で死んだよ。」

「今ここに居るのは……毒舌家ランク1位、オツツダルヴァだ……」

「あ……はいはい、仕事から抜け出して来たわけか」

「ま……それは置いといて、早速お葉書いつてみよ」

「よし、俺が読もう…え、ペンネーム、狐目 さんからの投稿…  
『更識嬢、レイヴン、今晚はと言っておこう』  
はい今晚は」

「今晚は」

「え、つと…『最近私に無断で秘蔵の不・家特製プリンを食べた奴  
が居るのだ。許せない。  
知っていたら教えてくれ。』

KARASAWAで消し炭にしてやる』との事だな。

葉書が涙か何かで染みてるのは気のせいか…？

更識は何か知ってるか？」

「私は知りませんね」

テルミドルさんは「オツダルヴァだ！！」…知らないそうです  
「

「まあそういうわけだ、今度新しいプリン買ってきてやるから元気  
出せよジャック・O。」

…では次、ペンネーム 弾・人生 さんからの投稿…

『更識、レイヴン、今晚はだったか？』はい今晚は」

「今晚は」

「え…『そろそろ出番が欲しい。  
いい加減作れ』

だそうです。

そういえば居たな…独立傭兵組の奴ら」

「あんまりビッグボックスで見ませんからね」

「まあ、空気で構わんがな」

「まあ、作者曰わく、必ず出番は作るって言ってるから、大丈夫だ。心配するな、リム・ファイヤー。」

「どんどん行くぞ。え、ペンネーム　お　ら　く　る　　さんか  
らの投稿…『更識嬢、レイヴン、今晚は』はい今晚は」

「今晚は」

「え…『あらゆる勝負で、あらゆる手を使ってもジャックに勝てない。』

「知恵を貸してくれ』だそうです」

「諦めましょう」

「このゴミナントめ！」

「ボロクソだな。まあ、諦めた方が早いぞ…エヴァンジェ。  
では次…」

「テルミドオオオーーーーーウル！！！」

「め、メルツエル！？」

「さあ来るんだテルミドル！！まだサインをしていない書類が後  
五千万枚残っているんだからな！！！」

「や、やや止めるんだメルツエル！！本当にこのままでは過労死し  
てしまっ…や、やめ…メルツエー…」

パタン

「あー、ゲストがお帰りになったので、今日は此処まで」

「うん、またの機会にな、みんな」

「と言う事で、オールナイトORCA!!を最後まで聞いてくれて  
ありがとう♪

また来週ね♪」

「じゃあ柄沢君、お姉さんをお部屋までエスコートしてくれる?」

「残念だが、このあと直ぐにドイツに行かねばならないんでな」

「あらあらお仕事？」

「ああ、ドイツのIS部隊『シュバルツェア・ハーゼ』に模擬戦の対戦相手に指名されてな。

何でもG・ファウストの知り合いらしくて、そこで俺の話を聞いて相手に選ばれたらしい」

「へえ、もうそこまで名前が知られてるって凄いわね。  
お姉さんびっくり」

「まあ、報酬もなかなかいいし…断る理由が無いしな。  
じゃ」

パターン

番外編 ビッグボックスラジオ局

オールナイトORCA!! (後書き)

ここいらで少し執筆のスピードをあげたいのですが…筆が進まない  
!!

#### 第4話 転校生はセカンド幼なじみ〜その1〜（前書き）

誤りがあったので修正しました。

## 第4話 転校生はセカンド幼なじみ〜その1〜

ドイツ国内

独軍IS保有基地

第218市街地演習場

《未確認輸送機に告ぐ。

此方はドイツ国防軍N427国境警備管制塔である。

貴官らは我が国の国境を侵害している。速やかに国外へ退去され  
し、繰り返す…》

ドイツ国内にある、山間の盆地に広がる市街地を見た者が先ず最初  
に受ける感想は、皆等しく「恐れ」だ。

「此方は民間傭兵軍事会社、ミリタリー・セキュリティー・インタ  
ーナショナル：MSIAライメント、兵站輸送部隊所属の高速輸送  
機である。

貴国のIS部隊シュバルツェア・ハーゼと合同軍事教練を行う“社  
員”を連れてきた。

詳細の確認をされたし。

確認コード、48・695・8672」

その理由を語るには先ずこの場所について語らねばなるまい…

――此処は、世界でも類を見ない“曰く付き”の場所だ。

…数年前、まだ人々の記憶にも新しいであろう、世界中を揺るがせ  
た事件…『白騎士事件』。

その直後、開発者『篠ノ之束』によって世界中にばらまかれ、急速  
に脚光を浴びたマルチ・フォーム・スーツ『インフィニット・スト

ラトス』によって、世界のパワーバランスは崩れ去った。

世界中の政府機関はISの導入を先読みし、こぞって自軍戦力を縮小した。

それは、戦場で最強の座に君臨していた、AC『アーマード・コア』も例外ではなく…瞬く間に多くのパイロット達が軍縮の波に吞まれていった。

そんな中、解雇されたドイツ国防軍所属のACパイロット達が、傭兵部隊や世界各国の解雇されたACパイロットを吸収して武装蜂起。眼下に広がる市街地を占拠し、武装組織『レイヴンズ・ネスト』を名乗り、周辺国に対して宣戦布告した。

ドイツ軍はすぐさま 掃討作戦を立案し、実行。

レイヴンズ・ネストの戦力は約9800機…

軍縮した国軍に太刀打ち出来るわけが無い…誰もがそう思っていた…が然し、戦闘は僅か5日間で集結した。

10機にも満たないISと、たった1機のノーマルACによって…レイヴンズ・ネスト全勢力の殲滅と言う形で幕を閉じた。

《…コード確認、ようこそアライメント諸君。

君達を歓迎しよう。

…直ちに演習を開始してくれ》

輸送機の後部ハッチが開き、眼下に無人の都市が広がった。

「また来ることになるとは…な」

ゆっくりと倒れるように輸送機から“落ちた”。

重力に引かれるままに落下し、地面すれすれでIS・カスケードレインジを展開。

ブーストを噴かせてスタート地点に飛んだ。

「ただいま…皆」

《仮想標的に告ぐ、前方約10mに着地しろ》

「了解」

カスケードレンジで地面をホバリングしながら、ACの残骸を軽やかに左右へ避け、OBで一気に上空へ加速し、落下地点を確認する。

（前方200m地点に反応…1。  
こいつか）

『やはり、貴様がレイヴンだったか』

「ああ、久しぶりだな…ラウラ・ボーデヴィツヒ大尉」

敵機体情報検索

シユバルツェア・レーゲンです。

敵は高威力のキャノン砲、並びにAICを装備。  
全距離対応の、汎用性の高いISと予測されます。

『今は少佐だ』

「それは失礼」

（全距離対応型…それに相手はラウラ・ボーデヴィツヒか…厄介だな）

『では概要を説明する』

カスケードレンジを通して網膜に情報が表示される。

『貴様には私のシュバルツェア・レーゲンと、新開発された新設計重装型MBT（主力戦闘車両）20両と、再設計戦闘ヘリ10機を2回戦に分けて相手にしてもらう。手段は問わん、全て撃破して見せろ。』

1両と1機を破壊につき5000、私を撃墜出来たら10000、報酬を加算しよう。

但し、貴様が撃墜された場合は報酬減額だ』

エリア内検索 -

……完了

前方約2000mに特殊戦闘車両20両と特殊戦闘ヘリを最大望遠で確認。中型ミサイル搭載型5両、戦車砲搭載型15両、多連装ミサイル装備型10機。

「説明は終わりか？…始めよう」

『…これより試作兵器並びに試作装備の稼働テストを開始する。』

…見せてみる、貴様の力を』

120mm砲弾が砲身を滑り、空气中を駆ける。  
砲弾は音速に達し…

ACの残骸に直撃した。

「ばっ、危ねえ…なんて精度してやがる…!!」

砲弾は、OBで移動しているカスケードレンジの頭部装甲左側1ミリを掠め、直撃したACの残骸を爆散させた。  
その間にも、音速に近い砲弾が雨霰の如く降り注いでくる。

「…チツ、面倒だ！消えろ!!」

武装選択

YWH16HR-PYTHON

主兵装のENレールガンをフルチャージし、真正面からブツ放した。  
極超音速の高密度EN弾が中央のMBTに直撃し、周囲を巻き込む大爆発を起こした。

《フルチャージのPYTHONを使用…

EN不足の為、絶対防御が正常に作動していません》

網膜に投影されたHUDのゲージが真っ赤な点滅を繰り返し、EN残量が残る僅かを示していた。

「損傷率3%…EN残量は、と…空間機動率92%カバー…支障無し…よし」

『…よし、じゃないだろ！これでは試験にならんじゃないか！！』

ビシッ！と、戦車やヘリだった残骸を指差してラウラは声を荒らげた。

「な、なんだってー、そりゃたいへんだー（棒読み）」

『貴様…馬鹿にしているだろう…』

「I'm Thinker」♪♪（鼻歌）」

俺は内心冷や汗をダラダラとかきながら適当にごまかした。

『ぼ、ボーデヴィツヒ少佐！！少佐とレイヴン宛に…し、司令部より緊急回線です！！！！』

戦況管制官の口調から、只ならぬ事態が生じていると直感したラウラと俺は、既に戦士の顔に変わっていた。

《ボーデヴィツヒ少佐、レイヴン、聞こえるか？私はドイツ軍試作兵器試験部隊司令官のクラウス・ハルトウィック大佐だ》

『聞こえております、大佐殿』

「…なんだ、久しぶりじゃないかハルトウィック。RN動乱以来だレイヴンズネストな」

《ああ、だが…今は再開を祝っている暇はない。

…つい先ほど、我が国の国境に侵入した機影を多数確認し、我々は

付近で稼働試験を行っていたドイツ軍試作兵器試験部隊第801パンツァー中隊に調査と接触を命じた。

だが、目標と接触した直後、パンツァー中隊全機のシグナルロストを確認。恐らく、全機撃墜されたのだろう』

『そんな…パンツァー中隊にはISも2機配備されていた筈…それが撃墜されたと申されるのですか!?!』

《残念だが…事実だ。

そして未確認機は真っ直ぐ君達のいる演習場へ向かっている。

…そこで、だ。

レイヴン、緊急の依頼をしたい』

やっぱりと言うか…もう慣れっこだな。

あの時もそうだった。

ドイツ軍のISを援護するだけの任務だった筈が、俺の操縦技術を見た途端に敵を単騎で潰せだの言っただけの事はある。

鬼畜かてめえら…。

絶対DSだろ。

まあ、依頼を“期待以上”に完遂させて報酬ふんだくった俺が言える立場でもないか。

《…で、どうだ。受けるか?レイヴン》

話している間にドイツ軍から提供された情報を解析していたが、結果は“微妙”だった。

(この反応群は…間違いなく“奴ら”だ。

…然し“奴ら”が絡んできるとするなら、テルミドールに指示を仰ぐ必要が…連絡取ってみるか)

「すまん、うちの“社長”と話をさせてくれ」

俺は自分が知る中で、この世で3本の指に入る馬鹿に通信を入れた。  
網膜にORCAのマークが映った。

ザッ…ザザッ…

『マクシミリアン・テルミドルだ!!!』

「いちいち叫ぶな鬱陶しい!!」

『…で?どうしたんだレイヴン』

「今現在任務中だったんだが…“奴ら”の接近を確認した。恐らく、狙いは十中八九俺だ。」

…“殲滅”許可が欲しいんだが」

『……ふむ…いいだろう。』

既に貴様の“あれ”を発進させてある。

…我々の存在を知らしめるいい機会だ。クローズプランの前倒しと行こうじゃないか』

俺は学園がある方向の空を見た。

確かに一筋の飛行機雲が晴天の空に伸びている。

「気が早やすぎるだろ…あのバカ」

- 敵勢力到着まで残り5分

- “ 味方 ” 到着まで残り 10 分

敵機殲滅を優先します

「 着いてくれるか？ ラウラ少佐殿 」

『 ふっ… 舐めるなよ… “ 同族殺しの英雄 ” 』

闘いの火蓋が切って落とされた

#### 第4話 転校生はセカンド幼なじみ〜その1〜（後書き）

さて、次回はランカー1位の力がすべてなあの御方と、女々しいあの子が出て来ます。

オリ主のACも登場します。

まあ例によって白いあの子なんですが…

さて、次回は2〜3機敵としてノーマルACを出しますが…AC3か、ACSLから出演したらいいなあという奴らを教えてください。  
ではm(ー)ー)m

第4話 転校生はセカンド幼なじみ〜その2〜（前書き）

（。ω。；）

更新が遅れた…。

そして投稿したのが会社に向かうバスの中…

## 第4話 転校生はセカンド幼なじみ〜その2〜

side：ラウラ

「何だ…こいつら…これが兵器だと？」

これが私の、“敵”を見た時の正直な感想だった。

これが兵器だと…？

馬鹿げている。

そいつらは赤みがかった長細い胴体に1つ目と言う出で立ちで、私とレイヴンを見つけると物凄い速さで体当たりをかましてくる。

（無論全て避けているが）

避けた奴らがぶつかつた廃墟や、ACの残骸が木っ端微塵に爆散しているのを見る限り、相当量の高性能爆薬を搭載しているはずだ。つまり…

「此奴等は…特攻兵器なのか！？」

『ああ、本来なら“これよりも”大多数での特攻による、拠点・敵勢力の殲滅を目的とした集団特攻兵器群…そのほんの一部だ』

「こ…これで一部だと！？どう見ても歩兵大隊規模は居るぞー！」

接近するまで気付かなかったが、敵はECMを装備しており、数を巧妙にごまかしていた。

…確かにこの数ならば、並みのISならものの数秒でスクラップだろう。

「レイヴン、すまないが前衛を頼む。私のシュバルツエア・レーゲ

ンの装備は支援向きだ。近距離であの数を捌ける自信が無い」

『…了解した。少佐は支援に専念してくれ…死角は任せたぞ?』

「…ああ、任せろ!!」

side:レイヴン

《レイヴン、すまないが“味方”の到着が少し遅れる》

頭部ユニットから響いてきたテルミドールの声に耳を傾けながら、低消費ENモードに変更したPYTHONの一撃一撃を、ミリ単位で特攻兵器の頭部パーツにクリーンヒットさせていく。

「どれくらいだ?」

《…5分程だ。此方でも、出来る限り応援を急がせてはいるが…なんとか耐えてくれ、としか言えんな》

たった5分…と考える者も居るだろうが、戦場は刻一刻と表情を変える。

つまり、1分・1秒の気の迷い、油断、状況判断ミスが命取りとなる。

その下で、ありとあらゆる手段を使って自身に有利な状況を作り出す。

それが“戦争”…

そして俺はその“戦争のプロ”だ。

「…やるしかない、か…然し 相変わらず神経を逆撫でしてくれるな、テメエ等は！―！」

side:???

高高度を飛行する一機の輸送機。

その中には、2人の男が向かい合ってキャットウォークに座っていた。

「…いいか、我々の仕事は劣勢のレイヴン達を援護する事だ。従って、なによりも迅速さが求められる…わかるな」

「はい、師匠」

1人は栗色の短髪で鋭い目つきが特徴的なロシア人。

もう1人は茶髪で短髪、おどおどした感じのアメリカ人。

「最優先目標であるレイヴンとドイツ軍ISの援護に全力を注げ。任務を完遂しろ。…話はそれからだ」

「勿論です！日頃の修行の成果…とくにご覧ください！！」

《まもなく作戦領域です》

機内にアナウンスが流れ、機体の高度が下がっていく。

その機体の格納庫に格納された全く同じ姿の2機のACは、ただただ…戦の時を待っていた。

side：レイヴン

「…どういう事だ」

敵の全く予想外の行動に、俺達はただ呆然とした。

『撤退…していく…?』

何千と居た特攻兵器が突如として全機反転、戦線を離脱し始めたのだ。

俺は地上に降りてシステムをサーチモードに切り替えた。

・システム   サーチモードに移行します。

『どういう事だ…このタイミングで…なぜ   ん?』

その時だった。

轟音と共に崩れるビルの壁の内部から、四脚ACが出現した。

ラウラ少佐は突如現れた敵に困惑し、対する四脚は、背中から大型

のENレールガンを展開し、いきなり撃ってきた。  
ラウラ少佐の反応は鈍く、避けられない。

俺はラウラを突き飛ばした。

視界が白く -

装甲が焼け -

激痛が走り -

右腕が消し飛んだ。  
それも跡形もなく。

「が っ ……!!」

『なっ、レイヴン!?!』

痛みをこらえ、機体の損傷率を調べる。

損傷率 32%

右腕部消滅

「っ ……此奴…」

眼前でENレールガンを再度チャージしている四脚は、見下すように俺達にマシンガンに向けた。

『あなた達に恨みは無いが…仕事なのでな』

「…くっ」

レーダーに引っかからなかった…。

と言う事は…事前にこのポイントに潜んで…？

『此方ムーンソルト、敵ISを確認！

これより戦闘を開始する！！』

『テンコマンドメンツ、了解。

クローバーナイト、さっさと仕留めるぞ！』

『了解だ』

正に万事休す。

4脚に加え、軽量2脚タイプ2機に軽量フロートタイプの、計4機に囲まれる。

こっちは機体損傷中破ISと無傷のIS、計2機のみ。

…然し

『くっ…どうするんだレイヴン！？』

「心配すんなよ…」

余程運命の神様は俺にご執心のようだった。

「“お仲間”の到着だ」

遙か上空の輸送機から2つの黒い影と、遠くから凄まじい勢いで突っ込んでくる白い影があった。

『随分と調子悪そうだね』

『ふん、お前らしくもない』

「ジノーヴィーに…モリ・カドル!!?」

『レイヴン、聞こえる? アブ・マーシュから預かったの。使って』

「…フィオナ!?!」

白い機体がVOBをパージして着地し、地面をなめらかに滑りながら両腕のアサルトライフルを連射する。

『何だこいつは!!!』

『き、聞いてないぞ! こんなもの』

『ちっ、下がれ!!! 只の機体じゃない!!!』

抱囲していた連中が器用に銃弾を避けて距離を取った。

白い機体が俺達の目の前に停止して仁王立ちする。

「ホワイトグリントか…面白い! 来い少佐!!」

『な…は!?!』

ISのままホワイトグリントのコックピットに取り付き、ロックを

解除する。

するとフレームがスライドして“複座”のシートが現れた。

「今からホワイトグリントの起動シークエンスに入る！ジノーヴィーとモリ・カドルは援護を頼む」

『ふむ…了解だ。修理代はエヴァンジェの小僧共に出させるか…。行くぞ、モリ・カドル』

『はい！師匠！！』

ジノーヴィーとモリ・カドルが敵に突撃していく。

2人の機体、「デュアルフェイス」と「ピンチベック」はノーマル開発の父と謳われる三社のうちの1つ、クレスト社のパーツを用いた同じ構成の突撃強襲タイプのノーマルACだ。

2機の特徴的な2門の肩武装、大型グレネード砲は近距離での間合いの確保や、中距離での強襲攻撃、遠距離での支援砲撃など、多彩な場面で活躍する非常に優秀な武装だ。

特にジノーヴィーは、上空で滞空しながらこのグレネード砲を撃つ戦闘スタイルを得意とする、「レイヴンズアーク」の最上位ランク1。

そしてランクは低いものの、特攻兵器襲来を生き残ったモリ・カドル。

そんじょそこらのレイヴンなどでは到底足元にも及ばないだろう。然し4対2の劣勢には変わりない。

『む…中々やる。レイヴン、調子はどうか』

「もうすぐだ」

- access

- main system . setup

- A . M . S . standby

- connector . set

シートの首辺りから五寸釘位のコネクタが延びてきて、首に突き刺さった。

「…っ！ なかなか慣れないんだよな」

- A . M . S . active

「お おい、大丈夫なのか!？」

少佐が顔を覗いてくる。

因みにラウラが居るのは俺の膝の上だったりする。  
少し…いや、相当気まずい。

「…ああ、問題はない。それより後ろのシートに座って、対Gプロテクタ - を装備しろ。両脇に付いてる奴だ」

「あ ああ、わかった」

- 言語読取完了・日本語に固定

- コジマ汚染抑制装置起動

・コジマ汚染レベル：0・1%

「…凄いな…話には聞いていたが、本当に汚染レベルが全くないとは」

「何の話だ？」

「いや、こつちの話だ」

・全項目クリア・システムオールグリーン

「よっしゃ！ホワイトグリント、起動！」

360度全方位視界のコックピットが起動し、視界を周囲の廃墟が埋め尽くした。

すぐ目の前では、4対2の熾烈を極める乱戦が続いている。

「あ、そうそう。少佐は何Gまで耐えられる？」

「な、なにいつ　ぐうあああ！！！！？」

OBを展開して、予備動作なしに一気に加速した。  
その速度、実に3000km。

『な！？がつ！！』

軽量2脚のACのコアにBFF製のアサルトライフルが食い込み、貫通した。

その弾数、僅か1発。

『なっ、ムーンソルト!!!一撃だと!?!』

『クソっ、何なんだあの機体は!?!』

「「隙有り!?!」」

困惑する軽量級ACの脚部に、ジノーヴィーとモリ・カドルがレーザーブレード・ダガーで斬りつけ、行動不能にする。

『何だこいつの機動は!?!』

四脚の攻撃をQBで避けつつ、距離を詰める。

敵の撃ってきたENレールガンがホワイトグリントを捉える、が…  
プライマルアーマーに阻まれ、極僅かにプライマルアーマーを減退  
させただけだった。

「2人とも下がれ!!あれを使う」

『了解だ』

『了解』

- コジマ粒子圧縮

- 広域散布用展開装甲起動

・アサルトアーマー：バースト

アサルトアーマーはプライマルアーマーを応用して造られた新技術だ。この技術は、コジマ粒子を高濃度に圧縮する事で、ネクストを中心とした周囲を一掃するコジマ爆発を起こす。

代償として、使用した場所に致命的なコジマ汚染をもたらすが、“例のシステム”のお陰か、ネクストを起動させても全く外部汚染レベルが上がらない。

正直言つて、レイヴンはネクストを運用する気が無かった。その理由の一つが、この世界の空を見た時の気持ちだった。

この世界はこんなに清々しいのかと…

空はこんなにも蒼かったのかと…

やはりここはあの薄汚れた世界じゃないんだと…

だから…汚したくなかったんだと思う。

アサルトアーマー展開直後の、コジマ粒子の淡い光が晴れると、吹き飛んだビルの残骸に軽量級の2機が埋もれ、四脚が目の前で機能を停止していた。

『終わったな』

『終わりましたね』

「まあとりあえず…」

『「任務完了だ」ですね』だな』

side:ラウラ

ゆっくりと飛翔し、飛び去っていく大型輸送機が見えなくなるまで、私はその場に立ち尽くした。

そして胸の中で、レイヴンと交わした言葉を反芻した。

『レイヴン…その…済まない。私のせいで…』

『…済まないと思うなら、もう二度と戦場で迷うことは絶対にするな。迷いは油断を生み、油断は死を招く。…それに、結果的に俺も少佐も生きてるし、任務も無事終了した。…まあ、試作兵器試験は曖昧になっちゃったが。それでいいじゃないか』

『レイヴン…』

『…時間か。じゃあな少佐』

『…ラウラ…でいい』

『…ん?』

『ラウラでいいと言った。名前で呼んでくれて構わない。だから…その…』

『……柄沢秋仁。』

『え…？』

『俺の名前。まあ偽名だけだな。また機会があったら、本当の名前を教えてやるよ。それまで“奴らから”生き残ってみろ。…じゃあな』

「あき ひと…からさわ…」

何故だろうか。

レイヴンの名前を口にすると胸の奥がざわつく。

顔も真っ赤だ。

自分に何が起きているか解らない。

やはり年長者に聞くのが一番だろう。

私はプライベートチャンネル（秘匿回線）を開いた。

『…通信受託、クラリッサ・ハルフォーフ大尉です』

クラリッサ・ハルフォーフ大尉。

我がシュバルツェア・ハーゼ『黒ウサギ隊』の副隊長を勤める副官だ。

歳は22。

この部隊が発足されてからの付き合いだが、当時から隊長の座を巡ってライバル関係だ。

私が隊長に就任してからはギクシャクとした関係が続いている。

出来れば他の人物に聞きたかったが、隊に支障が出ると困る。  
だから副隊長であるクラリッサに話した方が得策だ。

「私だ、大尉。済まない、任務中に」

『…如何なさいましたか』

「聞きたいことが…ある」

side：クラリッサ

隊長の声色から、只ならぬ事態だと判断した私は、自分の作業・敵ACの回収の手を止め、部隊に招集をかけた。

「…緊急事態でしょうか？」

『いや…違う…その…聞きたいことがある。…レイヴンを知っているか？』

「はい、隊長を庇って負傷した傭兵上がりですか？」

『そうだ。…それで、その…あいつを思い浮かべると…』

「思い浮かべると…？」

『胸がざわつくんだ！クラリッサ、これは何なんだ！！』

「  
.....はい？」

『最初はこんな事は無かったんだ！なのに今では奴の顔を思い浮かべるだけで...クラリッサ、助けてくれ！私はどうしたらいい...！』

ガラッガラガラッ！！

（皆手に持ってた工具落とした）

「隊長が...泣きながらせがんで...」

「隊長が顔真っ赤に...」

「...じゅるり」

『く、クラリッサ...？』

「隊長...今...どちらに...？」

『ヘリポートだg「10秒で向かいます」へ？』

「貴様らあ！！隊長を愛でに逝くぞあ！！ついて来い！！！！！！」

「「「「「はい御姉様...！！！！！！！！！！」

その後、部隊内でのギクシャクとした関係は綺麗サッパリなくなり、ラウラと部隊員は仲良くなったそうだ。

メデタシメデタ…シ？

side:???

10時間後

日本 IS学園

「やっと着いた」

夜のIS学園。

その正門に、小柄の少女が立っている。

肩にボストンバックを背負い、髪はツインテール。

顔立ちは東洋系だが、日本人ではない。

少女は携帯を出して電話をある人物に繋げた。

「あ、もしもし鳥爺<sup>ヲ</sup>ちゃん？今ついたよ」「リイイイイイイイイ  
イン！！！！」…って王爺<sup>ク</sup>ちゃん！？」

淡い青色に塗装した国連軍のハンヴィーが正門の目の前にドリフト

しながら停車した。

中から出てきたのは金髪のイギリス人と、初老の中国人。共に同じ制服を着込んでいる。

「鈴！！私を独りにしないでくれえ！！」

「王爺ちゃん…大袈裟過ぎだよ」

「そうだぞ、ワシチャオロン王小龍」

「あ、鳥爺ちゃん」

「黙れ鳥大老！貴様は学園に勤めて居るんだからいいだろう！いつでも鈴に会えて ウオオオオオオ！！怨めし！」「落ち着いてください王大人」グボオア！！」

金髪の少女が何処からともなく取り出したハリセンで王小龍と呼ばれた老人の後頭部を叩いた。

「さあ、応接室に行きますよ王大人」

「むう、リリウム…また太刀筋がよくなつたな」

「頼むぞ、王小龍」

「一夏、覚えてるかな…？」

「り、鈴！！！！一夏とはだ」「いい加減にしてください王大人」ブホア！！！！」

こうして、役者は揃いつつあった。

然し、レイヴン達が立ち上がるのは…まだ当分先の話だ。

#### 第4話 転校生はセカンド幼なじみ〜その2〜（後書き）

やっと出せた王小龍にリリウム。

ムーンソルト、テンコマンドメンツ、クローバーナイトはサイレントラインの旧管理者の場所出てきます。  
懐かしい…

因みにラストレイヴンの四脚ちゃんの設定が無かったのでオリキアラとして次回も出します。

第4話 転校生はセカンド幼なじみ〜その3〜（前書き）

（ 、 、 ）（σ）D、（

これ以上レイヴンとリンクス出すのはキツいぜ！

## 第4話 転校生はセカンド幼なじみ〜その3〜

side：レイヴン

ドイツでの任務達成後、俺はIS学園地下のビッグボックスにある会議室に顔を出した後、自室に荷物をぶち込むとその足で寮の食堂へ向かった。

随分と腹が減ったから、ゴードンに何か飯をありつこうと思っただら…

「ん？なんか騒がしいな」

なにやら女子が騒いで居るようだ。

「…と言うわけで、織斑君とここには居ないけど柄沢君のクラス代表決定おめでとう！」

「「「おめでと〜！」「」」

ひょこつと頭だけ出して見ると、一組全員とほかの組の女子数名が、真ん中に座っている一夏に向かってクラッカーを乱射していた。

壁には「織斑一夏と柄沢秋仁クラス代表就任パーティー」と書いた紙がデカデカと張り付けてある。

そうか、あの試合の…

「はあ…って、柄沢！！」

ヤベ、見つかった。

まあ隠れてた訳じゃないからいいんだけど。

「うそ、柄沢君！ナイスタイミング！！」

「柄沢君どこ行ってたの？」

女子と一夏がワイワイガヤガヤと騒ぎながら近づいてきて、俺の格好を見て静まり返った。

まあ、全身裂傷やら青あざやら…右腕が無くなってればそうなるか。

「か、柄沢！どうしたんだよその身体！！」

「あ、あゝ…えと、実は10tダンプに轢かれちまって…損傷が激しい上に破傷風やら伝染病やら発症してたから仕方なく切断した」

取りあえず嘘を並べ立てた。

ORCAの活動を“まだ”こいつらに知られるわけには行かない。

「それと変に同情するな。そう言うのは嫌いでな。今まで通りに接してくれるか？」

「当たり前だろ？なあ、皆」

一夏の問いにクラス全員が頷いた。

（結構…いい奴ら、なのか？）

「じゃあ気を取り直して…早速代表2人に突撃インタビュー!!」

カメラを持ったメガネの女子…黛薫子が俺達にマイクを向けた。

「じゃあまず柄沢君。出身を教えて」

「知らない。でも日本じゃないのは確かだ」

……。

「じゃ、じゃあ次ね。兄弟とかいるの？」

「知らないなあ。たぶん居るんじゃないか? いても多分死んでるだろうけど」

……。

「…りよ、両親は…」

「いない。俺試験管ベビーだし」

……。

「…ごめんなさい」

「いいさ。今の御時世いくらでも居るしな」

『言葉は不要か？レイヴン』

“おまえ”もそうだったな

俺は誰にも聞こえないように呟いた。

side:???

「王小龍とリリウムがORCAに下ったか」

「そのようだ。大方鳥大老辺りが孫で釣ったんだろう。それよりロ―ディー、ジェラルドはどうした」

「…レオハルトの下へ行った。そろそろ着く頃だろう…それよりウィン・D、“カロード”と“企業連”からの離反者はどうだ」

「…オツツダルヴァに王小龍、リリウムにジェラルドまで…挙げ句の果てにはカニス、ダンIIモロ、CUBE、メイ・グリーンフィールド、有澤隆文、エイIIプール、シャミアとド・ス、リンクス戦争のオリジナル…、フランチェスカにユージン、メアリー・シェリー、サダーナ、ボリスビッチ、アンジェ…悲惨だな」

「…特に留意すべきは、やはりあの男か」

「No.39レイヴン…そしてNo.9…いや、今は柄沢秋仁…だ

ったか。平気でジャイアントキリングをやったのける化け物だから」

ガチャ

「人を化け物呼ばわりするな、全く」

「れ、レイヴン!？」

「なぜ此処が!！」

「丁度外に此奴が居たから」

俺が首根っこ掴んでいた男をひょいと持ち上げた。

丁度猫を持ち上げる感じた。

「すまねえ、ウィン・D」

「ロイ・ザーランド…」

「ってか会合するぐらいならもつといいん場所があっただろ。なんでボロアパートなんだよ」

「仕方がないだろう。金銭的に無理がa」「まあ取りあえずテルミドールが焼き肉行くからお前ら連れて来いって言われてるんだわこれが」

ローデীর首根っこ掴んでロイ・ザーランドと同じく車に投げ込んだ。

「くっ、ロイ・ザーランド！！貴様はいいのか！こいつらに反抗せず！！！」

「べつつに？丁度腹減ってたし、ウィン・Dも乗り気みたいだしな。美人の要求が最優先さ」

「わ、私は認めんぞ！私は……」

「そうか…ローディーはテルミドールの自腹じゃなくて自分の奢りじゃないと気に喰わんのk「仕方ない行くとしよう」」

「本当に面白いなお前ら」

その後焼き肉屋での会議はローディーの奢りという事実が蔓延し、まともに話が進まずに閉幕した。

因みにンジャムジャヴァオ-が異常な食欲を垣間見せ、ローディーの財布をからにさせてORCAに引きずり込んだのは御愛嬌。

第4話 転校生はセカンド幼なじみ〜その3〜（後書き）

最近、鈴も意外とイケると知った俺

第4話 転校生はセカンド幼さなじみ 〵4〵 (前書き)

更新が遅れて申し訳ない…orz

流石に3作品同時はキツイ

#### 第4話 転校生はセカンド幼さなじみ ㄥ4ㄥ

「今日は前回の続き、飛行訓練を行う」

久しぶりの…と言ってもたった一週間だが…実技授業を受けるため、グラウンドで整列していた俺達の前に、クライア…織斑先生がやってきて皆にそう伝え、授業が始まった。

「ふうん、ISってなかなか面白いわねえ」。“戦術機”に応用出来ないかしら…？」

ベンチに座っている“この女”と俺を除いて。

「レイヴン、実は会わせたい人物がいる」

ビッグボックス内にある第2総合技術室で、テルミドールがそう切り出した。

この第2総合技術室は、主に生体技術を研究するための部屋だ。

勿論、ORCA旅団の旅団特記事項において

『生体兵器、並びに生物兵器の開発・生産・使用を禁止する。また、それらに準ずる物の所有も禁止する』

となっているため、専ら疑似生体義手・義足・内臓や新型パイロツトスーツの開発が主だ。

因みに第1から第4まであり、それぞれ

『AC・IS基礎パーツ開発・生産』

『生体技術研究』

『AC・IS武装開発・生産』

『量子力学研究・因果律量子研究』

となっている…らしい。

「なあテルミドール、因果律量子って…なんだ？」

「それについても今から説明する…入ってくれ」

ドアがスライドして、メルツェルに連れられて白衣姿で紫色の長髪の女が入ってきた。

「…っ！？…初めまして…かしら？」

私は国連軍太平洋方面第11軍横浜基地所属“だった”、香月夕呼よ」

「ORCA旅団副旅団長、柄沢秋仁だ。こんな格好で失礼した」

今の俺の格好は、上半身裸で右腕にISカスケードレインジの腕部パーツを改造して造った機械義手を移植している最中だった。

生体義手は1から造らないとストックが無いため、今は臨時の処置でこの義手をつけることになった訳だ。

「言ってもいいんでしょう？テルミドール」

「構わんよ。元よりそのつもりだ」

「じゃあ……実は私、この世界の人間じゃないわ。いや、厳密にはこの世界の人間だけど…」

「…は？」

5時間経過…

「…と言うわけ」

「つまりお前さんは平行世界から来た香月夕呼で、この世界の香月夕呼と融合しちまって斯斯然々と言うわけか」

「そゆこと。…で、こつからが本題なんだけど…あんだ、兄弟とか居たりする？弟とか」

俺は内心驚いた。俺に弟がいることを知ってる奴は限りなく少ない。アルテリア・クラニウムでの戦闘の後、アイツがどうなったか…俺にはわからない。

『兄さんは何も解ってない！！…1つの命を想う事が人類の罪だつて…どうして言えるんだよ！！…！』

結局、企業側についたあいつとは決別したままだ。

「やっぱり…あんだの弟、私の世界に居るわよ」

「…え」

「じゃあ直ぐ元の世界に戻るのか？」

「ええ、あっちじゃまだBETAと戦ってるから…わたし1人此処に居るわけには行かないわ」

夕呼は、グラウンドで はしゃいでいる女子生徒を眺めながらそう呟いた。

「…なら、せめてあいつの機体を…ストレイドを持って行ってやってくれ」

「それは仲間としての頼み？」

「あいつの兄として…兄弟としての頼みだ」

「はあ、やっぱりあんた達似てるわ」

夕呼はそう言つて鼻で笑うと、晴天の蒼空を仰ぎ見た。

「自分がどうなろうと関係無しに、自分の大切なものを優先する…本当に…“餓鬼くさい英雄さん達”ね」

「戦場には…英雄になりたい奴なんて居ないさ。只、結果的にそうなるだけだ」

戦場で英雄と呼ばれる奴らは…なんてことはない、只の人殺しだ。どの世界でも同じと言つわけか。

「…俺は…英雄なんかより、伝説と呼ばれる方が嬉しいがな」

授業が終わり、腹掬えの為に食堂に向かうと、一夏達と見慣れない奴が1人教室から出て来た。

「あ、柄沢。飯食いに行かないか？」

「別に構わんが…セシリアはどうした」

クラス代表決定戦の後辺りからか…セシリアの一夏や俺に対する態度が劇的に変わって、最近では大概は一夏達にくっ付いている事が多くなってきた。

だから今日みたいに居ないのは珍しい。

「ああ、それなら…っと、来た来た」

俺の背後から計4つの足音が聞こえてくる。

振り返ると、セシリアが楽しそうに3人の男女と話をしていた。

「…あら？あなたは…」

「フランチエスカ！？」

「ユージン！？」

「何で此処に！！」

「王大人と共にORCA旅団へ下ったのです」

「リリウム・ウォルコット…」

後ろに居る一夏達が皆して頭の上に？マークを浮かべている。

「あら、鈴さんじゃありませんこと」

「セシリアじゃ〜ん。元気だった？」

「あれ？知り合いなのか？」

一夏がセシリアと、鈴と呼ばれた女子に話しかけた。

「ええ、私の実の双子の姉である此方のリリウムお姉様は、鈴さんのお爺様にあたる王小龍様と師弟関係なのですわ」

「だから家族ぐるみでよく会ったりしてたわけよ」

「へえ〜っと、そうだ。柄沢、こいつが凰鈴音。俺の幼なじみで二組のクラス代表だ」

「ふうん、アンタが“二人目”なんだ。…って、アンタその腕何？」

「…ん？ああ、ちょっと事故ってな。切除したから今朝新しくつけてみたんだ。…鳥大老と王小龍から話は聞いている、よろしく頼む…じゃあ行くか」

俺達は揃って食堂に向かった。

食堂に入ると、昼休みというだけあって人でごった返していたが、その中でも異彩を放つ我等が食堂のオッサンこと、ゴールド・ゴードンだろう。

そして期待を裏切らないゴードンは、タンクトップ（筋肉が隆起してて物凄い事になってる）にズボンという出で立ちで汗を滝のように流しながら、中華鍋やフライパンと格闘していた。

因みに…実はゴードン、学園内でその隆起した筋肉の巨体に関わらず、人気が高かったりする。  
無論料理面で。

「よう、ゴードン。相変わらず精が出るな」

「む、レイヴンか。丁度いい、食事が終わったらこの目録をグリーン・ホーンに渡しに行ってくれ。恐らくビッグボックスのハンガー（格納庫）に居るはずだ」

「ん…予定も無いし…まあ、忙しそうだしな…わかった。行つてこよう」

ゴードンからUSBを受け取り、ステーキ定食の券を一枚差し出した。

「助かる。代わりにステーキを一枚プラスしよう…黒毛和牛の最高級品だ…勿論学園の運営資金だ…」

「ゴードンよ…ソチもなかなか悪いのう…」

「ふ、レイヴン程ではない…」

「「ふっふっふっふっふっ…」」

「なあ筈、あれなんか楽しそうだな」

「辞めておけ…私達には早過ぎる…多分」

昼飯を食べ終わった俺達は、地下のビッグボックスに足を向け、エレベーターに乗った。

…ん？

俺“達”？

「…って、何で一夏達まで居るんだよ！！此処から先は特別禁止区域だぞ！！」

「何か面白そうだったから…つい」

「秋仁さん、私達に隠し事はいけませんわよ」

「私は…その…一夏が莫迦をせぬようにだな…」

「いいじゃんケチ」

此奴等……

「はぁ……わかった」

そう言うとい夏達の顔が明るくなる。

…が、

「…真改、いるか？」

「……此处だ……」

「「「「うわっ…えっ！?!」「」「」

突然エレベーターの天井から灰色の着物を着た初老の日本人が逆さまにぶら下がって現れた。

「規約書を此奴等にやってくれ」

「……了解……」

「「「「規約書…?」「」「」

「そう、正式名称ORCA旅団最重要機密保持用特別規約書だ。此处に名前を書いて拇印を押せ。これから見る物は…他人、知人、友人、家族、母国に限らず決して口外するな。…もし口外したら、下手すると……」

「へ、下手すると…?」

「…御想像にお任せしよう(ニッコリ)」  
( )( )(何されるんだ…! ? )( )

…チーン

《S1階デス》

エレベーターの扉が開くと、とてつもなく広い格納庫に出た。  
いや、これを格納庫と呼んでいいのだろうか…？  
なんせ奥行きは約5 km、高さは約3 kmもある。  
そしてその中には巨大な6本足の体躯が鎮座しているのだ。

「で、でけえ…!!」

「なんなのよ…これ…」

「驚いてくれた様だな。此奴が俺達の次期主力AF、スピリット・  
オブ・マザー・ウィル…その“第?番艦”だ」

「え…えーえふ…?」

一夏が頭を捻って答えを求めてきた。

「AF…アームズフォートって意味だ。…国家がISを導入するた  
めに、自国兵器を大幅に縮小しているのは知ってるな」

「ええ、我が祖国イギリスでも、ACを始めとした陸戦兵器や航空  
兵器を削減していますし…鈴さん、中国も同じような状態でしたわ  
ね?」

「まあ、あたしの国の場合は、王爺ちゃんが主導してAC部隊の有用性を説いてたから其処まで進んじやいないけど」

鈴やセシリアが意見を述べて、話がチンプンカンプンな一夏は頭から湯気を出していた。

「あゝ一夏、お前の目の前に一台の車があったでしょう。もしも、たった1リットルで簡単にアメリカ大陸を横断できるが、天文学的な額のする量産があまり出来ない車と…燃費はそこそだが短時間のうちに低コストで修理が出来て、尚且つ大量生産できる車、どっちを取る？」

「そりゃあ、一杯造れて替えが効く方だろ？」

「つまり、そう言う事だ。《新たな軍事力は、コントロールを第一とし、代替不能な個人に戦力を委ねることは、現に慎まれるべきである》…これが今現在、国家や企業が危惧するものであり、《代替可能な多数の凡人によって制御され、安定したハードウェアとしての戦力を約束する》という企業のソリューションに基づいて開発されたのが…このAFだ。現にこのAF単騎で攻撃特化型IS5機分の火力に匹敵する」

「…すげえ…」

「…んあ？レイヴンじゃねえか」

大型搬入口からグリーン・ホーンのAC、ホット・スパークがコンテナを両腕で持つて現れた。

「おつ、丁度いい所に…ゴードンからお前に目録を渡してくれって

言われてたんだ」

『ゴードンの兄貴が？…ああ、そう言や《バシュン！》言ってたなそんなこと」

頭部パーツが前にずれて、中からパイロットスーツ姿のグリーン・ホーンが現れた。

「ほら よつと！…お勤めご苦労さん」

USBをグリーン・ホーンに投げつけ、相手は軽くキャッチする。

「おう、助かったぜ！…ああ、そうだ。リム・ファイヤーとヴァオーが探してたぜ」

「リムとヴァオーが？珍しい組み合わせだな」

「さっきカニスの奴と一緒に第三セクターの演習場に入ってたぜ」。  
「…そう言やフィオナのねえちゃんもいたな」

グリーン・ホーンが顎に手を当てて、そう言った。

「…そういえば、ドイツでの一件以来会っていない…いい機会だ、会ってこよう。」

「すまない、マザー・ウィルの整備は頼んだぞ」

そうして俺達はグリーン・ホーンと別れて隔壁ブロックに歩を向けた。



ダダダダダダダダダダ！！！！！！！！！！！！！！！！

( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( ) ( )  
あ う わ ……

想像して貰いたい。

戦車型ネクストと4脚ノーマル、2脚ネクストがガトリングやフィ  
ンガーマシンガン、果てにはチェインガンやネクスト用マシンガン  
を地下に再現された荒れ地の中、近距離で乱射しているのだ。

端から見たら、弾をばらまきながら発狂しているだけにしか見えな  
い…。

因みに、リム・ファイヤーが駆る『バレット・ライフ』は一発も被弾していない上に、遮蔽物や地形を巧みに駆使して両腕部計10門の瞬間火力重視マシンガンとノーマル用チェインガン2門による断片的な掃射でジワジワとネクスT2機のPAを削っている。

ヴァオーに至つては時折使うQB意外、殆ど動かず背中  
クイックフリスト
の大型ガトリング砲2門で他の2機を近付けず、確実に追い詰める。

はたまたカニスは、お得意の射撃機動で2機を翻弄し、被弾率も、既に半固定砲台と化したヴァオーに比べれば微妙足るものでしかない。

「…凄い… ACってあんな動きが出来るのか…！？」

「動きに無駄がない…あの『グレイデイツツィア』という機体のパイロットも、只弾をばらまいているように見えて、相手との間合いをうまく具合に調節している…私も精進しなくては…」

「…レイヴン！」

「え ぐはっ！！」

管制室の隣にあるVIP室でリム・ファイヤー達を観戦していると、突然管制室の扉が開き、白衣を着た短髪の同い年位の女性が、脇腹に勢い良く抱き付いて…否、突っ込んで来た。

「な…フィオナ…！」

「レイヴン、逢いたかった！！…ずっと、ずっと逢いたかった！！  
！アルテリア・クラニアムの戦闘でロストした時は本当に心配した  
んだから！！！！」

「…すまない、熱くなって周りが見えなくなる…俺の悪い癖だ。も  
う二度とあんな真似はしない…約束だ」

「…あなたは“また”帰ってきてくれた…。私は、私はそれで…」

フィオナは俯いて涙を流した。

居たたまれなくなった俺は、優しく頭を撫でてやった。

『ああ…これで、いい。…その力で、貴様等は…折れるなよ…フィ  
オナを頼む…』

ジョシユアとも約束した。

結局、ジヨシユアとフィオナ、そして俺と“あいつ”の4人で酒を飲み交わすという夢は叶わなかった。

涙も流した。

何度も懺悔した。

幾度と無く葛藤した。

けれど、後悔はしていない。

「…え〜つと、柄沢？」

一夏が耐えるに耐えかねて声を掛けた。

「ああ、すまん。…フィオナ・イエルネフェルト。コジマ技術の第一人者で、俺の専属オペレーターだ」

「フィオナ・イエルネフェルトです。ごめんなさい、取り乱して…」  
挨拶した直後、腕時計のアラームが鳴り響き、夕方の6時を告げていた。

「…やべ、テルミドール待たせっぱなしだった！行くぞ、みんな」

そう言っただけ俺は管制室内のマイクを手を取った。

『リム！ヴァオー！カニス！テルミドールが会合を開く。至急第8セクターの『円卓の間』に集まれ！』

『なんだなんだあ！！一緒に演習するんじゃないのかあ！！レイヴ  
————ン！！！！』

『ちっ、仕方ない。ヴァオー、カニス、急ぐぞ』

『はっ、マツハで撤収してやんよ！！』

俺はマイクのスイッチを切ると、フィオナと一夏達を連れて、第8  
セクター行きのエレベーターのボタンを押した

「なあ柄沢…何するんだ？」

「ついてくれば解る。…ついてくればな」

円卓の間には既にほぼ総てのレイヴンとリンクスが集まっていた。  
但、まだ数人きていない。  
恐らくミッションに出払っているのだろう。

「ついたか…彼女達も一緒だな」

「ああ、遅れてすまない。テルミドール」

先頭に俺、その後ろにフィオナ、一夏、箒、鈴、セシリア、ヴァオ  
ー、リムファイヤー、カニスの順で入っていった。

「すげえ…改めて思うとこんな設備が学園の地下にあったなんて…」

「私も驚きましたわ…」

「うむ…」

「もう何でも有りって感じね…」

全員が席について、一夏達が円卓の中央に行った所で、テルミドルが立ち上がり、言葉を紡いだ。

「明日からクラス対抗戦だというのに、此処まで足を運んで貰い、感謝する。」

…私は、マクシミリアン・テルミドルだ…」

「…ようこそ、世界最大の反動勢力…ORCA旅団へ…歓迎しよう」

#### 第4話 転校生はセカンド幼さなじみ 〵4〵（後書き）

結構長めでした。

因みに今別個で書いてるマブラヴオルタネイティブの小説とリンクしています。

そっちも近々更新しますのでよろしくお願いします。

第5話 決戦！ クラス対抗戦… I S 学園防衛戦勃発！？（前書き）

青パルちゃんに勝てないorz

## 第5話 決戦！ クラス対抗戦… IS学園防衛戦勃発！？

side：レイヴン

5月半ば。

ビッグボックスにて一夏達をORCA旅団に向かい入れる事になったのがつい昨日。

そして今日は一夏の対抗戦前の特訓最終日だった。

本来なら今日クラス対抗戦第1試合が始まるはずだったのだが、アリーナの試合設定やら何やらで明日に変更になったわけだ。

「さて一夏、明日のクラス対抗戦に向けての最終調整だ。今までの特訓で質問はあるか？ 勿論、セシリアや箒に対してでも構わない」

一夏は頭を抱えて唸った。

「えっと… 結局俺は“雪片式型”だけでやるしかないんだよね…？」

「…グリーン・ホーンとトロット・S・スパーがざつといじくったが… “拡張領域”が皆無だから、“後付装備”が付けられない。だから今まで通り“初期装備”の雪片だけで闘うしかない。…諦める」

一夏の問い掛けにそう答えた。

「シャキツとしろ一夏！！ IS操縦も漸く様になってきたんだ」

「そうですねよ、一夏さん。立ち回りさえ間違えなければ… 勝機はあります！」

セシリアと箒が一夏に激励の言葉をかける。  
が、一夏の顔は暗いままだ。

「王小龍から聞き出したんだが…鈴のIS甲龍は、“衝撃砲・龍砲”や近接戦闘用武装“双天牙月”を装備した…お前の白式と同じ近接格闘型だそうさ。…セシリアの言った通り立ち回りと間合いに注意すれば、勝てない相手じゃない」

因みにこの情報はリリウムとフランチェスカを懐柔して王小龍に自白剤ブチ込んだ結果だったりする。

「そうは言ってもなあ…」

一夏が第3アリーナのAピットのドアセンサーに触れて、隔壁を解放する。

「待ってたわよ、一夏」

ピットに先回りしていたのだろう…腕組みをしてふんと不敵な笑みを浮かべた鈴が、専用IS、甲龍を装備して立っていた。

「…で、一夏。反省した？」

「へ？なにが？」

「だ、だから！昨日あたしを怒らせて申し訳なかったなーとか、仲直りしたいなーとか、あるでしょうが！！」

「いや、そう言われても…鈴が避けてたんじゃねえか」

「あんたねえ…じゃあなに、女の子が放っておいてって言うたら放っておくわけ!？」

「おう、なんか変か？」

「変かって…ああ、もうっ！」

「…おい一夏、話が読めんぞ」

俺は耐えきれずにそう切り出した。

「いや、なんかさ?…昨日柄沢と別れた後、部屋に鈴が来て昔の約束がどうかなんとか…それでわけわかんねえのに頬を叩いて出て…」とかじゃないだろうな」

俺はそこまで聞いてある仮説が成り立った。

「まさかとは想うが一夏、その約束…『私の作った○○を毎日食べて…』とかじゃないだろうな」

「おっ!?!よくわかったな柄沢！」

.....。

「鳳鈴音、俺はお前に同情する…」

「辛かったろうに…」

「大変でしたわね…鈴さん」

俺達は揃って鈴の肩を叩いた。

「…え？なに？俺が悪いのか？」

「……当たり前だろ、この唐変木オブ朴念仁！！」「……」

ズビシッと全員で一夏を指差して声を荒らげた。

「兎に角、謝りなさいよ！！」

「だから、なんでだよ！約束覚えてただろうが！！」

「あつきた。まだそんな寝言いつてんの！？約束の意味が違うのよ、意味が！いいから謝りなさいよ！！」

「だから、説明してくれりゃ謝るっつーの！！」

（流石に…拙いな）

…これ以上は明日のクラス対抗戦に支障が出ると判断し、俺が2人の間に入った。

「まあ、まで2人共」

「「止めるなよ（んじゃないわよ）柄沢<sup>アンタ</sup>！！！！」」

「これ以上は明日の試合に支障が出る。特に一夏は、心身共に万全のコンディションで挑みたいだろ？」

「それは…まあ」

「一利ある…わね、確かに」

2人共漸く落ち着いたのか、声の音量が下がって来た。

「こうしよう。明日のクラス対抗戦、そこで勝った方が負けた方に何でも一つ言うことを聞かせられるってのはどうだ？」

「おう、いいぜ。勝ったら説明してもらっからな！」

「せ、説明は、その…」

鈴はそう言っただけで顔を真っ赤にさせた。

察してやれよ一夏…

「なんだ？やめるならやめてもいいぞ？」

一夏は親切心で言ったのだろうが、それがまずかった。

「誰がやめるのよ！あんたこそ、あたしに謝る練習しておきなさいよ！…！」

「なんでだよ、馬鹿」

「馬鹿とは何よ馬鹿とは！！この朴念仁！間抜け！アホ！馬鹿はあんたよ！！！」

「だからいい加減止めろって…」

慌てて再度仲裁に入るが、一夏の一言で俺の苦勞は水の泡になって

しまった。

「うるさい、貧乳」

ドガアアアン!!!!!!!!!!

いきなりの爆発音と衝撃で、部屋全体が微かに揺れた。

見れば鈴の真正面に居た一夏の頭の右側1センチに思いつき殴ったような…そんな感じの、直径約30センチのクレーターが出来ていた。

「言っただわね…。言っではならないことを、言っただわね!!」

「い、いや、すまん。今のは俺が悪かった」

「今の『は』!?今の『も』よ!いつだってあんたが悪いのよ!!  
…ちよつとは手加減してあげようかと思っただけど、どうやら死にたいらしいわね…。いいわよ、希望通りにしてあげる。――全力で、叩きのめしてあげる」

鈴は一夏を一睨みすると、ピットを出て行った。

然し…

「ごめん柄沢…折角止めてくれたのに…」

「気にするな、誰にでもあることだ。それに…」

俺は鈴が残していった壁の傷を見て頭の中で状況をシミュレートする。

「龍砲の威力…まあ、出力は下げてただろうが…こいつを確認できただけでもめっけもんだ」

「なかなかの初速ですわね…」

「発射タイミングが全く分からなかった…衝撃砲…侮りが足し、だな」

セシリアと箒も的確な感想を述べた。

「さあ、アリーナを使える時間は少ないんだ。サッサと特訓に移ろう！まずは昨日のおさらい、無反動旋回と三次元躍動旋回、それと三次元機動においての考察だ」

「おう！」

俺、箒、セシリア、一夏の順にISを展開してアリーナ内へと飛び立った。

side:一夏

第2アリーナ Aピット

試合当日、第2アリーナ第1試合。

組み合わせは俺と鈴。

噂の新生生同士の試合とあって、アリーナは全席満員。それどころか通路にまで立って見ている始末だ。

因みに会場に入れなかった生徒や関係者は、リアルタイムモニターで鑑賞しているらしい。

「いいか、一夏。昨日の龍砲を見て分かるように、衝撃砲などの空間兵器は砲身や砲弾、発射タイミングまで全く分からない事が特徴の、ブルー・ティアーズと同じ第3世代兵器だ。ああいった相手と戦う場合は、先ず相手の癖やインターバル『発射間隔』を読み取れ」

「インターバル？」

「そうだ。如何なる兵器でも次弾を発射するまでには、必ずタイムラグがある。

その隙を突け。

それと癖だが…例えば近接兵装で牽制しつつ、マシンガンでじわじわと…とか、マシンガンで敵を追い込みつつ、近距離でショットガンをブチ込んだり…なんかだ。誰しも個々の戦闘スタイルと言う物がある。相手のパターンを読み取れ。そうすれば勝機は自ずと見えてくる。…行つてこい！」

「ああ、勝つてくるぜ!!」

柄沢からのアドバイスを受け、ピットから飛び出した。

S i d e : ? ? ?

- 目標地点…確認

- 全システム…チェック終了

- コード：224…フェーズ

- 修正プログラム…最終レベル

- 全“NB”自立統合操作システム…良好

シリアルナンバー：XA-26483…確認

最優先排除対象と認定

- 排除開始

side:レイヴン

一夏がイグニッションブーストで距離を詰め、必殺の一撃を入れる直前、それは起こった。

ズドオオオオン……！！

突如アリーナ全体を衝撃が襲い、アリーナ中央ではモクモクと土煙が舞い上がっていた。

「アリーナ上部のシールド破損……同時に、アリーナ中央に高エネルギー反応、ISだと思われます……！！」

山田先生がアリーナ全体から送られてくる情報を統合し、上司である織斑先生に逐次報告する。

「織斑先生、生徒と関係者に退避命令を……本館に待機中の教師に出動命令を出して頂きたい」

「了解しました。……試合中止……！！凰！織斑！今すぐ退避しろ……！！」

観客席の隔壁がせり上がり、生徒と関係者の避難が始まった。

『鳥大老！カスケード・レンジで時間を稼ぐ！その間に学園の防衛体制を整えろ……！！嫌な予感がする、急げ……！！』

ピットに居た俺はカスケード・レンジを展開してアリーナに躍り出た。

アリーナに着地して、システムをサーチモードに移行する。

- 未確認ISを確認

- IFFに反応無し

- 所属不明機を敵と認識

- 該当データ無し：判別不能

- 全システム：戦闘域『ミリタリー』に設定します

『柄沢!!』

一夏と鈴が真横に着地した。

2機共に試合途中のため、かなり損害が酷い。  
特に白式はそう長く稼働出来ないだろう。

『いいか、俺が敵を惹き付ける。その隙にアリーナから退…うおっ  
!?!』

土煙の中から飛んできたレーザーをギリギリで避ける。

『チッ…逃がす気は無いってか?…仕方ない、一夏!俺と鈴であいつ攻撃して隙を作る!したらイグニッションブーストで一氣に接近、零落白夜でケリを付ける!!』

『えっ!?中の人どうすんだよ!!』

『そうよ、いくらなんでも…』

『あれに人は乗っていない、あれは無人機だ。』

…さっき調べたが、このアリーナには俺達の生体反応しなかった。  
つまり、あれは有人機じゃない』

『はあ！？無人機なんて、そんなのあるわけが…』

『来るぞ！！』

高出力のレーザーが土煙を掻き分けて何本も飛来し、俺達はそれを  
バラバラに避ける。

それと同時に、多弾頭ミサイルとロケット砲を乱射する。

『今だ、一夏！！』

『うおおおお！！』

一夏がイグニッションブーストで加速し、衝撃砲やミサイルの中を  
ただ真っ直ぐに敵を目指して突撃し、雪片式型の零落白夜を爆風の中、  
動きが鈍った敵に叩き付けた…

『な！？』

かに見えた。

突如天井から弾丸の雨が降り注ぎ、黒い異形のISをバラバラに粉  
砕、そして…

ターゲット確認

『ナインボール…』

排除開始

“紅”が舞い降りた。

**第5話 決戦！ クラス対抗戦… IS学園防衛戦勃発！？（後書き）**

やっと出せた？ちゃん…

因みにこの？ちゃん。

小説内ではノーマルでありながらネクストと同格の強さです。

第6話ボーイ・ミーツ・ボーイ…そして少年は壊れていく(前書き)

( - )

## 第6話ボーイ・ミーツ・ボーイ…そして少年は壊れていく

side:一夏

6月頭、日曜日。

俺は久々にIS学園の外…ではなく、ビッグボックスの医務室前にいた。

傍らには鈴や箒、セシリアもいる。

「柄沢…大丈夫だろうか…」

「大丈夫ですわ…きっと」

箒とセシリアがそう呟いた。

そうさ、あいつが…柄沢は大丈夫だ…

時は数週間前に遡る。

『ぐっ…が…あ……!?!』

「柄沢!!」

柄沢が赤いACに驚掴みにされ、ギリギリと締め上げられる。

そいつらは異常だった。

ACなのにIS以上の加速力と機動力で、動きについて行けない。あの柄沢でさえ後ろを取られ、今正に握り潰されようとしている。

助けに行こうにも、全く同じAC2機が邪魔をして動けない。

戦域データリンクのオープンチャンネルから、柄沢の声とバキバキと装甲が潰れる音が漏れる。

見れば、柄沢のISは火花を噴き、紫電を這わせている。

既に限界に近いのだろう。

「…めろ」

装甲がひしゃげ、血が噴き出す。

「…やめろ、…」

オープンチャンネルから、柄沢の断末魔が響く。

「やめろおお！…！」

『はああああ！…！…！』

その時だった。アリーナの天井の裂け目から弾丸の雨が降り注ぎ、柄沢を掴んでいるACを瞬時に蜂の巣にした。

『行くぞ、ダン・モロ!!』

『了解。セレブリティ・アッシュ、作戦を開始する』

降りてきたのは見慣れないACだった。

side：レイヴン

ナインボール：いや、ハスラー・ワンとはレイヴンズネスト動乱で戦い、そして俺が勝った。

確かに留めは刺したはずだ。

別人と言う選択肢を除けば、残る可能性は1つ。

「AI…か…!!」

《ターゲット確保：排除、排除排除、排除排除排除排除ハイジヨハイジヨはいじょ排除!!!!!!》

「がつ!!」

鷲掴みにされたカスケード・レンジから、被害報告が出るが目を通す暇はない。

オープンチャンネルから一夏の悲痛な叫びが響く。

装甲が耐えきれなくなり、割れる。

割れた装甲が皮膚を裂く。

（もう、駄目だな…こりゃ）

諦めて最後の瞬間を受け入れようとした時…

『はあああああ！！』

ナインボールが一瞬で蜂の巣になり、見覚えのある機体が2機降り立った。

『行くぞ、ダン・モロ！！』

『了解、セレブリティ・アッシュ、作戦を開始する』

「アンジェ…ダン・モロ！！」

『レイヴン、私に勝った貴様が…こんな所で死んで良いと思っているのか！！…ダン、後方からも来るぞ！！数は5機だ！！』

『え！そんなに！？…うわっ！！』

寸前までダンが居た場所に弾丸が降り注いだ。

『む…無理だ、避けられねえ！！』

『くっ！！』

避けられずにプライマルアーマーに被弾するが、所詮はノーマル武装。

減退させはするが、破ることは出来ない。

然し臆病な性格のダン・モロには効果抜群だった。

『…撤退だ、レイヴン達を連れて撤退する！！…アンタもそうしろよ、無理だぜこんなの！！』

ダン・モロは撤退しようとするが、アンジエは逆にナインボール郡に突入し、ムーンライトで一体を切り裂いた。

『逃げる…それもいい…だが、前を向かぬ者に、勝利はない！！』

『…っ！！！！』

アンジエは搭乗ネクスト“オルレア”のブースタを噴かせる。ナインボールとの距離を一気に詰め、ムーンライトで正面の一機のコアを一撃で溶断、左に避けたもう一機にマシンガンを斉射し撃破する。

しかし死角から接近した一機に背後を取られた。

直後、真横からレーザーが飛来してナインボールのコアを貫通した。

『…ってやる、やってやるよ！やればいいんだろ！！…もう逃げるのなんてごめんだ！！』

『…っ！…はははっ、それでこそリンクスだ！！』

アンジェとダン・モロは、驚異的な早さでナインボール群を駆逐していく。

その隙に、俺はナインボールの腕部残骸から脱出し、機体各部をチエックした。

「損傷：率、98%…廃棄するしか、ないか…ん？」

ふと目に留まったのは、あの黒い謎のIS…その残骸だった。這いずって近づき、機体を調べる。

やはり無人機だった…が、派手に壊れているように見えるのは、機体制御を司る配線系統を破損しているだけで、目立った損傷はない。俺は意を決して、インターネサインを発動させた。

《機体並びに生体ユニット損傷率：90%を越えました》

《エネルギー供給率：低下》

《危険度レベル：Aと認定》

《機体情報抹消：新規機体情報登録：生体ユニット再構成》

カスケード・レンジが淡い光を放ち、その姿を変化させた。

巨大な両腕の腕部モジュール、肩から腕部モジュールへと繋がるケ

ーブル、黒い装甲…

《生体ユニット再構成完了…新規機体情報登録…機体名：ゴーレム  
？…stand by》

「…ゴーレム？…起動…！」

なんとか再起動したゴーレム？を立ち上がらせ、各種システムを戦闘域に引き上げる。

《…第一目標達成…撤退開始…》

「…なんだ…？」

突然ナインボール群が反転し、一斉に領域を離脱していく。

『追うか？レイヴン』

「…辞めておこう。今は事態を收拾するのが先だ。…テルミドール、被害は？」

秘匿回線からテルミドールに呼び掛ける。

『施設や生徒に目立った損害はない…が、防衛に当たっていたズベ  
ン・L・ゲヌビとファントムが機体中破、エイ＝プールと有澤隆文  
が小破判定だ。いずれも1日あればパーツ換装を含めて戦闘配備可  
能だ』

俺は死人や怪我人が出ていない事に安堵した…

「あ、れ…？」

途端、視界が急に暗くなり、意識が朦朧となる。

一夏が何かを叫びながら近づいてくるのを感じながら、俺は意識を手放した。

side：一夏

治療室のドアが開き、中からプリンシバル先生とジャウザー先生が出て来た。

「あら、一夏君達じゃない。そんな所に居ないで入りなさいな」

「えっ？」

「丁度、定期健診も終わった所だから構わないさ」

そう言っって俺達は部屋の中へ通され…

「ロン！！国士無双！！」



side:レイヴン

「痛てっ…ちつたあ、手加減しろよ」

「ごめん柄沢…つい…」

「謝る事はない一夏。…自業自得だ、お前が悪い!!」

「人が心配して来れば麻雀に明け暮れているとは、どういっ了見ですの!？」

「だから悪かったって…」

徹夜でアンジエ、ダン・モロ、ズベン・L・ゲヌビといっしよに麻雀に明け暮れていたのが悪かったらしい…。

「やっぱりハズキ社製かキサラギ社製のがいいなあ」

「え?そう?キサラギは兎も角ハズキのってデザインだけって感じしない?」

「そのデザインがいいの!」

「私は性能的に見てミューレイ社製かミラージュ社製のがいいなあ。特にスムーズモデルとウラヌスモデル」

「あー、あれねー。モノはいいけど、高いじゃん」

隣の席で女子がわいわいと賑やかに談笑している。手にカタログを持って、あれやこれやと意見交換をしていた。

「ねえねえ、柄沢君と織斑君のISスーツってどこのやつなの？見たこと無い型だけど」

「あー、特注品だつて。どっかのラボが作ったつて…たしかイングリッド社製のストレートアームモデルだつて…柄沢は？」

「俺のは特殊でな…元々のモデルはローゼンタール社製のオーギルモデルで、それを企業連がわざわざ男用に改造したんだと…まあ、時期が時期だから一から作るよりも早くて完成度高いから俺は気に入ってる」

「企業連がわざわざ!？」

「すごい」

因みに、この世界の企業連はAC・IS関連の兵器開発企業の集まりで、相当な権力を持っており、国家であっても容易に干渉は出来ないらしい。

「さっさと席に着け、馬鹿共が」

織斑先生と山田先生が教室に入ってきて、慌ただしく皆が席に着く。そして山田先生が爆弾を投下した。

「実は今日は、転校生が来ています。それも2人です!」

クラスの九割が声を上げた。  
因みに後の一割は俺と一夏。

「ではどうぞ」

入ってきてたのは男1人に女1人。

皆男に目が行っていったが、俺は女を見て…時が止まった。

「…少佐?」

「…レイヴン!?!」

第6話ボーイ・ミーツ・ボーイ…そして少年は壊れていく（後書き）

やはり3作品同時は危険すぎる！

気力が持たん！！

第7話ルームメイトはフロンド貴公子…と黒い子兎〜フィオナ暴走編…1〜（前

ネタに走ってみました。

第7話ルームメイトはブロンド貴公子…と黒い子兎…フィオナ暴走編…1…

side:レイヴン

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れな事も多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

デュノア…たしかフランスのIS開発企業で、ローゼンタール社の親会社だったような…。

待てよ…レオハルトとジェラルドって、確かこの世界だとデュノア社の御曹司だったような…

あいつらの言ってた“妹”って…。

いや、まさかな…。

「お、男…？」

誰かがそう呟いた。

「はい。此方に僕と同じ境遇の方が2人居ると聞いて本国より転入を…」

「きゃ……………」

「はい？」

「きゃあああああああああああ！！！！！！」  
教室が揺れた。

「男子！3人目の男子！」

「しかもうちのクラス！！」

「美形！！守ってあげたくなる系の！！」

「地球に生まれてきてよかった！！」

其処までさかのぼるか！？  
ってか、地球以外の選択肢あったのかよ！？

「五月蠅い馬鹿共！！まだ紹介が終わっていないぞ！！……………ラウラ、  
挨拶しろ」

「はい、教官」

クライアントが教官かあゝ…

何故だ…今ふとセレン・ヘイズにしがかれている我が弟を連想したのは何故だ…

「ぶえくしょん!!」

「何してるのよ兄さん!! 右側から要撃級、数5!!」

「誰かが俺の噂してやがるな。…了解!! 行くぞ、まりも!!…セレン!! 砲撃支援要請だ!! B - 28エリアとG - 64エリアにありったけぶち込め!! どうせシミュレーターなんだから派手に行くぜ!!」

『全く…終わったらグラウンド200週だ!! 覚悟しろよ!!』

「どうした柄沢」

「いや…弟も苦労してるなあ…と」

「？」

然し、ラウラが転校生とはねえ。

世の中色んな事があるもんだ。

そんなこんなでラウラが挨拶を始めた…が、

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

……………。

「あの…以上ですか？」

「以上です…っ！貴様は…」

ラウラは突然一夏の目の前に歩いていき…

バシンッ！

「…っ？」

一夏の頬をひっぱたいた。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど……認めるものか」

「初日から派手だな少佐」

「当然の報いだ。…それより、なんで貴様が此処にいる。…ファウスト大将からは何も聞いていないぞ」

「え…少佐も？…G・ファウストの野郎、知ってて言わなかったな」

実はラウラ・ボーデヴィツヒ少佐。

G・ファウストの養子縁組にはいつていたりする。

人を好きになったことのないラウラを案じて、よくプリンシバルやエイ・プール、メイ・グリーンフィールドに相談していたりする。

因みに俺達が廊下で話しているこの時、背後の物陰からG・ファウストが親指をグツと立てて、

『負けるな…我が愛娘よ。…頑張つてレイヴンを落とすんだ』  
と、ラウラにエールを送つてたりする。

「…って、話し込んでる場合じゃねえ！！急げ！！織斑先生にしかれるぞー！！」

「な、なんだと！？」

全速力で疾走したが、運悪くクライアントに発見されてお叱りを受けたのはご愛嬌…。

一方その頃…ビッグボックスでは…

ビッグボックスの戦略中央管制室は日がな一日まったりとした空気が流れていた。

「此方管制室。ジャック、見回りご苦労様。不具合はあったかしら」  
『うむ、第7隔壁と第11隔壁：それと第43隔壁にボルトが外れた箇所があった。しっかり締めておいたので心配は無いだろう』

「了解したわ。“レイン”、フォックス・アイを格納庫に誘導、お願い」

「了解。フォックス・アイは第3格納庫へ移動してください。“エマ”、AFの状況を教えるってテルミドルが五月蠅いんだけど…」

「え〜っと…BFFのスピリット・オブ・マザー・ウィル2番艦は80%、GA・有澤のグレート・ウォールとランドクラブが共に79%、イクバル・アルゼブラのカブラカンが78%、インテリオ・オーメルのステイグロとアンサラ、イクリプスが72%ね。あと、防衛用とスピリット・オブ・マザー・ウィルへの配備用のプロキオンは既に完成。現在第9セクターの演習場で試験稼働中みたい」

レイン・マイヤーズ  
シラ・コードウエル  
エマ・シアーズ

この戦略中央管制室の統括責任者にして、ORCA旅団のACCオペレーターを勤める凄腕の3人である。

そして3人ともレイヴンと組んでいた時期もある……らしい。

「そう言えば……フィオナちゃんは何処に行ったの？」

「さっき飲み物買いに行ったわよ。第3通路の自販機に」

レインが扉をさして言った。

オペレーターは24時間万全の体制で不足の事態に備えているため、普段は4人でローテーションを組んでいた。

が、今日はビッグボックスとその周辺の地下施設をメンテナンスするため、4人とも駆り出されたわけだ。

「え？あそこの自販機確か壊れてなかったっけ？」

……………。

「え？どうしたのレイン、エマ」

「あそこって……食糧庫あったわよね……」

「ええ。でも今はお酒しか………あ」

3人はレイヴンにフィオナを紹介された時、こっそり教えられた事を思い出した。

『いいか、3人とも…フィオナにむやみやたらと酒を…特にビールだけは絶対に飲ませるな…下手すると……』

「どっ、どうしよう…」

「と…兎に角、フィオナちゃんを通信で呼ばなきゃ!!」

もし3人の予想が正しければ、フィオナは自販機が使えずに、食糧庫に何か飲み物があるだろうと漁っているだろう。

因みに食糧庫に置いてある酒…もといビールは、ビッグボックスの場所が特定されないようにラベルから製造番号まで綺麗に消して、透明な瓶に入っているため、普通にジュースか何かと勘違いをしてしまう。

シーラが通信機を取って、フィオナに連絡を入れようとしたその時、異常な揺れと共に、ノイズの入った通信がオープンチャンネルで流れてきた。

『なぐんだか気分がいいのら』  
『』

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はい!」

一組と二組の合同実習の為、人数は何時もの倍だ。

出てくる返事も妙に気合いが入っていた。

「今日は戦闘を実演してもらおう。…凰、オルコット、柄沢！前に出る」

「え」

「わたくしがですか！？」

鈴とセシリアがクライアントに異議を申し立てる。

スパパァン！！

うん。

今日もいい音だ。

「専用機持ちですぐにはじめられるからだ。いいから前に出る」

「だからってどうしてわたくしが…」

「あゝあ、面倒臭いなあ…」

「柄沢は兎も角、お前等2人は少しはやる気を出せ。…ボソッ（あいつにいいところを見せられるぞ？）」

ん？クライアント今何か言ったか？

「やはり此処はイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね!!」

「実力の違いを思い知らせてやるわ!!」

..... (汗)。

「今、先生なんて言ったの一夏。僕聞こえなかったんだけど」

「俺が知るかよ」

やる気ゲージがマックスに到達した2人をよそに俺はIS、ゴールム?を展開した。

「それで、どちらがお相手に?わたくしは鈴さんでも秋仁さんでも、どちらとの勝負でも構いませんが」

「ふふん、望むところ。振り返ちよ」

「慌てるな馬鹿共。対戦相手は.....っと、頼むぞ柄沢」

キイイイイン.....!!

「はいはい、“ブースタ温めという”正解だったな」

「ああああーっ!!ど、どいてくださいっ!!」

あらかじめ温めておいたブースタを瞬時に噴かせ、一夏とシャルルに突っ込んでいく山田先生を、衝突する寸前、紙一重でキャッチしてゆっくり旋回しながら降り立った。

「怪我はありませんか？」

「は、はい…すみません／＼／／」

「あゝっ、山ちゃんお姫様抱っこされてるゝ！！」

「ずるゝい！！」

俺が山田先生をお姫様抱っこしていたのが気に入らなかったのか、女子達が非難の声（どっちかと言うと要望）を上げたが、鶴の一声で全て轟沈。

「いい加減黙れ！！…では、凰、オルコット、山田先生対柄沢の実演を行う」

「えっ！？柄沢さん相手に3対1で…！？」

「いくらなんでもそれは虐めじゃ…」

「ふっ…安心しろ。今のお前等2人じゃ、此奴に掛ければ秒殺だ…柄沢、手加減しろよ？」

「いやまあ、認めてくれるのはいいんですが…俺そこまで強くないし…それに、」

「手加減出来るほど器用じゃないですよ？…俺」

「構わん。ここにいる小娘達に“戦場”の空気を教えてやれ。…山田先生、悪いが全力で当たっていただきたい」

「は、はい！わかりました」

ムスツとしたセシリアと鈴が空中に昇っていき、俺は皆から離れた場所待機した。

何故セシリアや鈴のように空中に昇っていかないのかというと…実はこのゴーレム？、空中戦はあまり想定されておらず、砲撃力・防御力に特化した陸戦仕様になっていたからだ。

ゴーレム？はその特異な形状の巨大な両腕部を有しているため、空中戦では圧倒的に不利だ。

そのため、地上から対空機銃よろしく、圧倒的火力でねじ伏せる必要がある。

今度ブースタと新武装をグリーン・ホーンとトロット・S・スパイに考えて貰うとするか…。

「では…始め！！」

号令と共に機体を滑らせる。

「いただきますわ！！」

1秒前まで居た場所に、セシリアのスターライトmk3のビームが飛来し、それと同時にブルー・ティアーズを展開して追い縋ってくる。

「さっさと墜ちなさいよ！！」

そのビームの嵐の中を、鈴が衝撃砲を撃ちながら近接攻撃をししかけてくる。

「流石は幼なじみ、互いの特徴をよく理解してる。いい連携プレーだ…だが」

「なっ!？」

接近してくる鈴の背後に瞬時に移動して、後ろから巨大な右腕で拘束し、スターライトmk3を撃ったセシリアの方へ向けた。

「きゃあ!!!」

数発のビームが鈴に直撃し、そのまま地面に叩き付けた。

「鈴さん!?!…くっ!!!」

「終わり…だ!?!」

ズドン!!

激しい縦揺れ。

グラウンドにいた生徒は尻餅を突き、学園の至る所に設置されている電光ディスプレイは赤い文字で「警告」と表示されていく。

『レ、レイヴン並びに第1ES小隊に通達!!緊急事態だ!!!!』

「エヴァンジェ!?!どうしたんだ!!まさか…“管理者”の襲撃か!?!」



すぐさまクライアントと一夏達、それに今日転校してきたシャルルとラウラを連れて戦略中央管制室に入った。

そこは既にあらゆる画面が真つ赤になり、一番大きいスクリーンに映った地下施設の見取り図が斜め右下の区画からレッドアウトしていく…つまり修羅場と化していた。

「状況報告を！！何があった！！」

「フィオナ・イエルネフェルト博士が王小龍のストリクス・クアドロを緑色のペンキで塗装し強奪！更に拘束するため出撃したド・スのスタルカを中破させ、武装KIKUを奪って第10セクターを逃走中！！徐々に上部セクターへ侵入していきます！！」

最悪だった。

実はフィオナ、物凄く酒癖が悪い。

特にビールが酷く、天災並みの被害を出すくせに酔いが醒めると何も覚えていないという困ったちゃんなのだ！！

『しゝあわっせはゝ、あゝるいつてこゝないゝ、だゝかゝらあるいゝてゆゝくんゝだねゝ、ヒック』

「……重症だな…これは…被害は？」

「さっき言った、地下施設にて警備中だったド・スのスタルカが中破、常駐警備MT部隊第1大隊、第3大隊が壊滅状態よ。」

今のところ死傷者は出ていないけど、設備等に甚大な被害が出ているわ」

これ以上は計画に支障をきたすと判断し、テルミドールに許可を取って、防衛基準：1を発令した。

「各部隊は実弾装備で第8セクターの基幹トンネル内で待機、各ネクスト、ノーマルは第9セクターへ先行し、目標を拿捕する！！」

「グリーン・ホーン、ファントム、有澤はスピリット・オブ・マザー・ウィルの防衛に回って！！」

「Ωは何処に行ったの！……え！？鎮静剤の過剰接種で倒れた！？じやあそっちには鳥大老を向かわせるわ！！」

「第10セクターの全昇降隔壁を封鎖します！！残っている者は速やかに退避せよ！！繰り返す！！速やかに退避せよ！！」

『ジツダン、ドレダ！！』

『シーラ管制官！！実弾の入ったコンテナはどれだ！！』

「その第586番コンテナよ、ンジャムジ！！ケルベロス！！ガラムのは第2格納庫にあるわ！！」

『ヴェーロノーク、発進します』

『フラジール、何時でも行けますが？』

「エイップールはメイと一緒に第1基幹トンネルに！！cubeは第2基幹トンネルから先行してスタルカを回収して！！」

『私も出よう。いないよりはマシだろう』

『俺様も行けるぜ！！メルツェ~~~~~ル！！』

『吾が輩はcubeと共に盟友を救いに行きましょう！！』

「メルツェルとヴァオーは第3基幹トンネルだ！！ボリスビッチは急いでcubeに合流してくれ！！…皆、心して掛かれ！！」

「~~~~~え~~~~~（汗）」

「…まったく」

酔っ払い一人取り押さえる為に実弾を持ち出すORCA旅団の面々を見て、一夏達は溜め息をつき、クライアントは頭を抱えた。

然し、総ての元凶のターンは終わっていないかった！！

『い~~~~ちに~~~~ちいっぽ~~~~み~~~~いか~~~~で~~~~んぽ~~~~さ~~~~ん~~~~ぽ~~~~す~~~~  
ん~~~~で~~~~ほ~~~~さ~~~~る~~~~じ~~~~ん~~~~せい~~~~は~~~~わ~~~~ん~~~~つ~~~~わ~~~~ん~~~~つ~~~~  
…あ、レイヴンはっけ~~~~ん~~~~』

「…え”？」

酔っ払いVS…ORCA旅団最高戦力…

闘い？の火蓋は切られて落ちてしまった。

第7話ルームメイトはブロンド貴公子…と黒い子兎…フィオナ暴走編…1…（後

…え、新劇場版：破を見てたら書きたくなりまして…。

はい、声優ネタです。すいません

これを機にまだ出てないレイヴンとリンクスを出してみようかと…

第7話ルームメイトはフロンド貴公子…と黒い子兔、フィオナ暴走編…2…（前

短いです。

仕事が忙しくて書けないorz

第7話ルームメイトはブロンド貴公子…と黒い子兎…フィオナ暴走編…2…

side: 柄沢

ビッグボックスの最重要施設の1つ、『円卓の間』。

緊急対策本部として仮設司令部が設立されたこの場所に、重い空気が立ち込めていた。

「ジャック・O、状況報告を」

『第1〜第3防衛ラインの敷設は完了。最終防衛ラインの構築も、あと7割を残すのみだ』

ビルを呑んで暴走したフィオナは、第10セクターの昇降隔壁を突破した後、俺の居る第1セクターへの最短侵入路である大型基幹トンネルを上昇していた。

この大型基幹トンネルは、元々はAFの部品や大型パーツを搬入するために造られたトンネルで、IS学園の地下を螺旋状に潜っている様に掘られている。

それぞれ上層ブロック・第1基幹トンネル、中層ブロック・第2基幹トンネル、下層ブロック・第3基幹トンネルに分けられ、万一起侵入者があった場合はネクストでも破壊が難しいAF用の特殊強化合金製対衝撃圧装甲を用いた隔壁によって各ブロックごとに閉鎖、閉じ込める事が可能だ。

それぞれの区間には侵入者迎撃部隊用の昇降ゲートが設けられており、そこから更に各セクターへ進むことが出来る。

第1セクターへの道は、第1基幹トンネルの昇降ゲートにある。  
つまり、第1基幹トンネルの最終防衛ラインを死守せねば、俺の貞操が危うくなるわけだ。

「レイヴン、私も…私も参加させて欲しい」

「少佐？…いやしかし…」

ラウラが立ち上がり、作戦参加を表明した。

しかし今現在、まだORCA旅団に制式登録されていない少佐を応援に向かわせれば、間違い無く100%の確率で防衛用無人兵器群に蜂の巣にされる。

「残念だが、まだm「旅団登録は完了している。作戦参加は可能だ」  
…ってファウストいつの間に!？」

「…と、言うわけだ。戦力は多いに越したことはない。私からも、  
助力を頼みたい…頼む」

「テルミドール!？」

ラウラは義父の行動力の高さに驚いたが、画面越しにファウストが『頑張つて(レイヴンを)落とさない』と言った瞬間、目を輝かせて敬礼をした。

「はい、義父上。全力で(レイヴンを)撃墜致します!!」

と言って、円卓の間から駆け足で去っていった。

「…嗚呼、まったく！分かったよ！！ラウラはG・ファウスト、アンジェ、真改、プリンシバル、ローディー、リリウムと一緒に第2基幹トンネルから第3基幹トンネルへと進出！！目標を全力で拿捕しろ！！…直ぐに俺も出る！！テルミドール、後頼んだぞ！！」

俺はインカムをテルミドールに投げつけて、急いでラウラの後を追った。

side：三人称視点

第9セクター

基幹トンネル用進入昇降ゲート

第1防衛ラインの先頭、昇降ゲート防衛部隊の配備が完了したと同時に、フィオナの乗る緑色のストリクス・クアドロがやってきた。

「…目標を確認！！距離3000！！」  
部隊内に緊張が走る。

彼等にとっては、これが初めての実戦となる。

その相手が仲間で、然も酔っ払いとは、なんとも滑稽である。

「OGOTO砲撃AC大隊、前へ！！有澤の力を思い知らせよ！！」

『『『『『了解！！』』』』』

真っ直ぐにゲートへ向かってくるフィオナに、改良を施してOGOTO

T Oを積んだワカ率いるノーマルA Cの砲撃部隊が横列陣を組んで砲身を展開、照準を付けた。

『じゅんせいはいわん、つゝわん、つゝ……お！きたっ！！……P A展開！！』

「まだだ、まだ引きつけよ！！」

徐々にストリクス・クアドロが射程圏に近づいていく。

部隊の機体数は約50機、それに加えて自走砲に戦車、M L R S（多連装ロケットシステム搭載型自走ロケット砲車両）の混成大隊……  
備えは万全だ。

彼女には悪いが、此処で仕留める……！！

ワカは操縦桿を握り締めた。

「セーフティ解除！！……撃てえい！！！！」

ズドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド……！！！！

1機から炸薬徹甲弾が2発、50機から一斉に計100発が発射された。

照準、精度、発射タイミング、どれをとっても申し分ない砲撃がストリクス・クアドロに集中した。

ただ、

『きたきたあ……にゃあ！！！！』

侮っていたとするなら、

『『『『『『『『『『『『『『『『『『『『『『『』  
『『『『『『『『『『『』なっ…なにいいいいいい！！！！！！！！！！？』  
『『『『『『『』

ワカが暴走フィオナの操縦テクニックを甘く見ていた事であろう。

飛来する100発の砲弾をフィオナは避けるどころか、逆に突進していき有り得ない程柔軟な、紙一重の動きで回避していた。

然も丁寧にPAを切つてである。

『うおー、りや！！！！』

『わわわ…がっ！！！！』

先頭にいたノーマルタンクACに肉薄したフィオナは、KIKUで脚部無限軌道を粉碎。

QBを用いた高速軌道で砲火を潜り抜ける。

『ばっ、止める！！撃つな！！！！』

『うわっ、すまん！！！！』

『イデデデッ、ショットガン！ショットガン当たってるって！！！！』

『お、おい、射線に被るな！！！！』

密集していたのが仇となり、フィオナに向けて撃った弾で仲間が被

弾するなどの同士撃ちがあちらこちらで勃発。  
混乱が大きくなっていく。

『にははははは…わっ!?!』

高速で移動するストリクス・クアドロの目の前に、多数のミサイルが着弾し、爆風が巻き起こる。

「よもやここまでとは…イエルネフェルト女史を少しばかり甘く見ていたようだな」

爆煙の中から現れたワカの車懸が装備したグレネードで照準を付けた。

「然し私とてオリジナルのリンクスだ！仲間の為にも負けるわけには行かんの『うりゃ!?!』だぐあ!?!」

顔面に射突ブレードをモロに喰らい、壁に激突。

暴走フィオナは悠々と第1基幹トンネルへと侵入した。

「む…無念…皆の衆、息子よ…後は、頼…ガクッ」

ワカ、並びにワカ率いるOGOTO砲撃AC大隊壊滅。

死傷者数：0

精神的死傷者：200名（ワ力を含む）

第7話ルームメイトはブロンド貴公子…と黒い子兔〜フィオナ暴走編…2〜（後

一回区切ります。

流石に眠気には勝てないので

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3740t/>

---

アーマード・コア4×インフィニットストラトス〔誰が為に鴉は鳴く〕

2011年11月15日21時41分発行